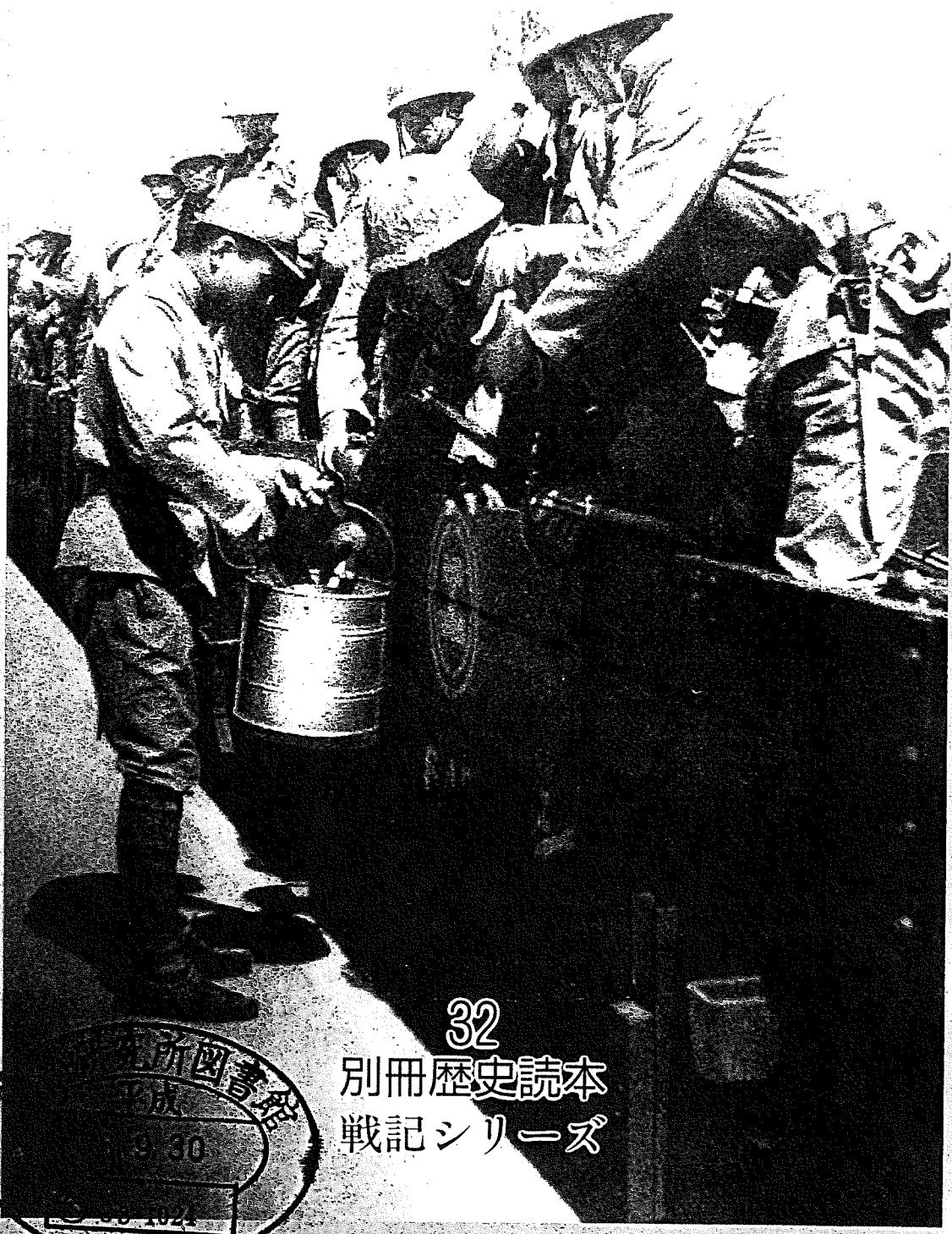


# 太平洋戦争回戦史



32  
別冊歴史読本  
戦記シリーズ



## 第2部 部隊と兵隊



構成・執筆  
森山康平

### COLUMN

「いよいよ明朝払暁、敵前上陸をするという前の日になって、初めてその命令を受けました。われわれは、出征の時もらつて来た千人針で鉄カブトの下の鉢巻きをギュッと締めまして、自分なりの覚悟をして、その敵前上陸の用意をしたんですが、私共は初陣で、実際の戦闘場面ではほんとに実感として敵弾が雨アラレと来るという感じがしました。そして陸地が迫るにつれて、精神状態というものは、おそらく半狂乱だったと思います。おそらくその時上陸部隊の三分の一くらいの損害が出たのではないかと思います。夕方に戦死者の方の死体を集めまして、それにガソリンをかけまして、焼きましたが、これがなかなか焼けませんでした。また海岸の砂地に血潮がにじんでおりまして、これを見て私は、戦争というものは悲惨なものだと、実感として最初の戦争でそう思いました。」

太平洋戦争開戦の直後、フィリピン上陸作戦に参加した上林吾郎氏の話に、緒戦の赫々たる戦果の中、すでに大きな犠牲が出ていたことがわかる。

太平洋戦争での地域別死没者数を見ると、フィリピン諸島の戦死者は、六十数万の派遣将兵のうち五十万人近くに達し、日中戦争を

戦をさけ、山岳地帯での決戦をえらんだが、二月三日マニラ陥落後、補給の途絶えた日本軍は山中に追いやられ、病死、餓死等の犠牲者が続出した。この間、傷病兵とともに山中

にあつた従軍看護婦の大山タイさんは次のよ

飢餓のなか、戦い抜いた日本軍兵士。(フィリピン戦線)。

「私は涙も出ないほどお腹がすいていた。敗戦を泣くには疲れすぎていた」

「恥を知る者は強し、生きて虜囚の辱めを受ければ、死して罪穢の汚名を残すこと勿れ」の戦陣訓がなかつたらもつともつとこんなに何十万の犠牲者を出さないで、無事に帰れた兵隊さんもいたかも知れません。フィリピンでは戦死よりも病餓死の方が多かつたといわれますが、病氣で動けなくなつた方も自決を選ばず、捕虜になれば、手当てが受けられたらはずだと思ひます」(テレビ東京 昭和42年10月/43年2月放送より)

うにその体験を話している。

「戦死した方は裸にしまして、使える物は全部、次の人のためにもらうんです。中には病室で、死にそうな人に目をつけて、看護婦さん、死んだら、自分にその軍服ください」と死なないから予約する人もおりました」大山さんはこれ以上逃げる所がないほど敵が来たら自決することになつてた。栄養失調で倒れる人があいつぐ。

「ああ、お豆腐のお味噌汁が食べたいわ」といって息を引きとった看護婦。朝起きてみると、枯木のようにやせほそつてひつそりと息を引きとつて衛生兵。だれも彼も疲れ果てた九月中頃、大山さんは敗戦を知る。続けた大山さんは語る。

「私は涙も出ないほどお腹がすいていた。敗戦を泣くには疲れすぎていた」

「恥を知る者は強し、生きて虜囚の辱めを受ければ、死して罪穢の汚名を残すこと勿れ」の戦陣訓がなかつたらもつともつとこんなに何十万の犠牲者を出さないで、無事に帰れた兵隊さんもいたかも知れません。フィリピンでは戦死よりも病餓死の方が多かつたといわれますが、病氣で動けなくなつた方も自決を選ばず、捕虜になれば、手当てが受けられたらはずだと思ひます」(テレビ東京 昭和42年10月/43年2月放送より)

# 師団の編成 その平時と戦時

陸軍部隊の最小の戦略単位が師団であつた。大部分の部隊はどこかの師団に属し、師団長の指揮のもと、作戦に従事した。

## 中隊以上の構成単位

中隊四個を一つにして一個大隊、三個大隊で一個連隊、二個連隊で一個旅団、二個旅団で一個師団というのが一つの原則だつた。

兵隊にもつとも身近な中隊  
兵隊の立場からすれば、平時の軍隊生活の基本  
が寝起きとともに、教育訓練を受ける。内務班は三、四個で一つの中隊を構成している。

内務班である。軍曹の班長を中心三十人ほど  
は内務班である。

中隊というのは、一番小さな戦闘単位であり、  
戦時になると一つの内務班が小隊となり、中隊長  
（大尉か古参の中尉）の指揮のもと最前線で戦闘に  
従事する。

農民から徵発したロバだが、心を和ませてくれたのだろう。（中国戦線）

中隊長だが、戦場に投入されると中隊長の戦闘に  
対する考え方や指揮の巧拙が、兵隊一人ひとりの  
生死に直接係わつてくる。やる気が起るものも戦  
意を喪失させられるのも、ひとえに中隊長の人格  
識見、あるいは戦意の程度如何というぐら、微妙  
なものであつた。兵隊は中隊長の顔色をうかが  
いながら、安心もし、不安にもなつた。

帝国陸軍は、軍隊の組織を一つの大きな家族に  
たとえることが多かつたが、兵隊にとつてのその  
家族とは、まさにこの中隊を指していた。家族的  
な結びつきのものに、一致団結して戦闘に邁進す  
る雰囲気を常に保とうとしたのである。中隊こそ  
兵隊にとっての安堵のすみかであった。

こうして陸軍の部隊は、小隊→中隊→大隊→連  
隊→旅団→師団といふ単位ごとに大きくなつてい  
く。平時にあつては小隊長といふのは一般には置  
かずすべて内務班長が統括していたので、実質的  
には今述べたように中隊が最小の戦闘単位だつた

これはすべて歩兵部隊を基準にした場合だが、  
歩兵部隊だけでは戦略単位（総合的な作戦を完遂  
できる戦闘単位）とはなれない。そこで、師団には歩兵旅団のほかに、騎兵連隊（のち搜索連隊ま  
たは戦車連隊）、砲兵連隊、工兵連隊、輜重兵連隊  
(補給輸送担当)などが編入されていた。

陸軍の歴史の中で、師団の下の単位である旅団  
がいろいろな変遷を重ねた。もともと二個歩兵連  
隊を一個歩兵旅団としていたが、師団全体が出動  
するほどでもないという場合は、この旅団に砲兵  
部隊や騎兵部隊、工兵部隊などを配属し、いわば  
ミニ師団という内容を備えて派遣した。こういう  
旅団を混成旅団と呼んだ。六七頁で詳述したよう  
に、混成旅団は師団長の指揮から独立して、独立  
して三箇にしたケースが多くなつた。戦略単位  
である師団の数をふやさなければならぬ事情が  
あつたことと、砲兵部隊や戦車部隊、あるいは自  
動車などをこれまでより多く配属して、総合的な  
戦力は低下しないどころかむしろ向上したとい  
う判断に基づいていた。こうした三単位制編成の師  
団がからは旅団といふ組織が消えた。代わつて登場  
したのが歩兵団である。歩兵団長が歩兵連隊を統  
括して指揮した。

## 命令と服従の実際

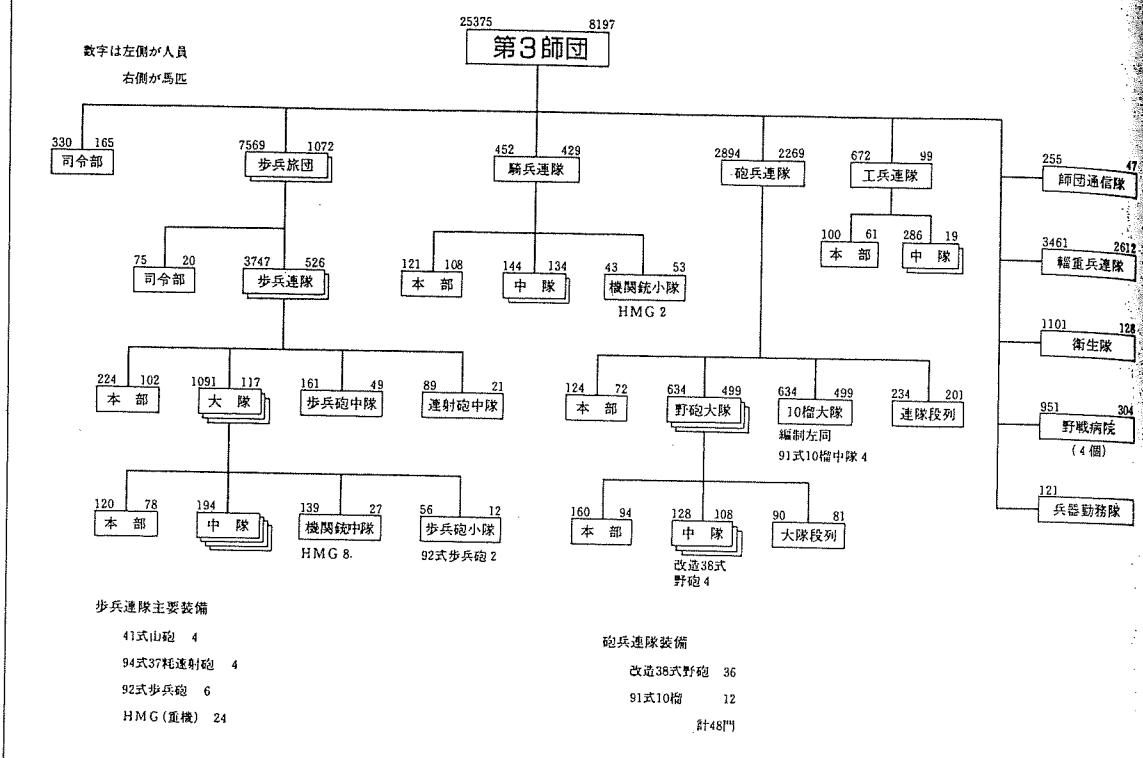
軍隊は階級社会である。階級官僚社会といつてもいい。下の者は上の者の命令に絶対服従するといふ社会である。下の者は上の者に對して、絶対的に敬意を表明しなければならなかつた。それが敬礼という形になつて日々実践された。欠礼は上官侮辱罪にあたり、批判的な言動も含めて处罚の対象とされたのである。

ただ、指揮という面からみると、その命令と服従という関係は、單に階級が上だからといつてでは成立しなかつた。師団長は、自分の師団に属する部下に対ししか指揮権限はなかつた。Aという師団長がBという師団に属する連隊長を指揮することはできなかつた。

これを裏返せば、兵隊は自分が直属する上官の命令以外には従つてはならないということである。帝国陸軍の最高司令官は天皇だつたが、天皇は師団長を直接指揮することができるので、師団長以下の指揮官に直接命令することはなかつた。實際には師団長に對して參謀総長が命令（指示）したが、命令そのものは天皇から出ていたという形式を踏んでいた。

兵隊はあくまで中隊長の命令でなければ動かなかつた。あり得ない話だが、天皇がお忍びで前触れもなく不意に、ある師団の陣中を訪れたとする。

(1) 戦時における師団の編制～日中戦争出動時



(表1) 上表は、日中戦争（支那事変）で動員された名古屋の第3師団がどのような編成をしていたかを示している。

平時では師団の人員は11858人・馬匹1592匹だが、戦時動員されると人員25375人・馬匹8197匹となっている。人員で約2・5倍、馬匹で5倍以上に膨れ上がっている。

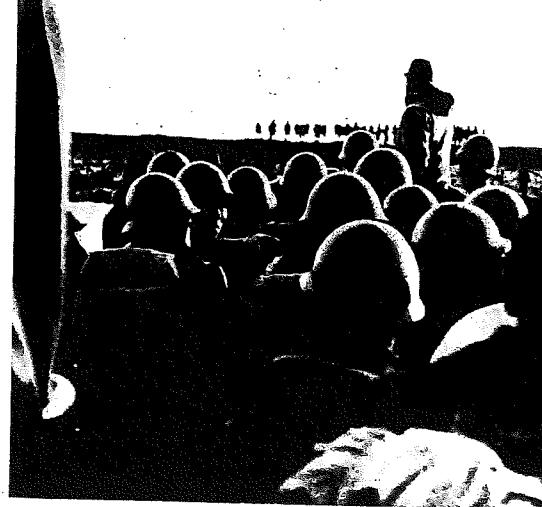
平時では、たとえば歩兵中隊でも1個中隊減らして3個中隊であるし、補給輸送担当の輜重部隊

隊はもつと少ない。この表によると、6個中隊で人員3461人・馬匹2612匹となっているが、平時では人員が2個中隊の約400人・馬匹が約300匹程度で教育訓練に当たっている。

そのうえ戦時動員となると、通信隊、衛生隊、野戰病院、など兵站部門が充実させられるので、勢い大所帯になった。

なお、砲兵連隊はここにあげたように野砲連隊が多かつたが、山砲兵連隊を持つ師団もあった。





ふと振り向いた兵隊は何を思ったか。(中国戦線)

命令を受けていない歩哨は誰何して天皇とわかつても、陣中に入るのを拒否することができた。原理的には兵隊である歩哨の態度は正しいと見なされていたのである。

### 天皇と師団長の関係

天皇が実際に師団長に命令を伝える方法はどんな形式によつていていたのだろうか。

たとえば、太平洋戦争（大東亜戦争）は海軍にあつては真珠湾攻撃、陸軍にあつては南方要域（マレー・シンガポール、フィリピン、ジャワ、ビルマ等）攻略で幕を切つたが、その最初の命令は海軍では「奉勅 命令部総長 永野修身」、陸軍では「奉勅 参謀総長 杉山元」となつてゐる。天皇の勅命を奉じて（うけたまわつて）、伝え

る、という形を踏んでいた。

こういう形の命令は最後に必ず「細項に関しては参謀総長（海軍に関しては軍令部総長）をして指示せしむ」となつていて、参謀総長がいろいろ指示するが、それは天皇の命令であるということを断つている。

命令の文面には天皇とか朕とかいう言葉が直接出てくることはまずないが、「帝国は」とか「大本當は」という主語が使用されていた。「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス（大日本帝国憲法第一条）」るから、「帝国は」というのは「天皇は」と同義だった。また、「天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス（同第十二条）」だつたから、天皇が主宰した「大本當は」は、天皇の統帥を示すものだったのである。

太平洋戦争における最初の命令は実際には、天皇→参謀総長・杉山元→南方軍総司令官・寺内寿一を経て、

第十四軍司令官・本間雅晴（フィリピン攻略）  
第十五軍司令官・飯田祥二郎（ビルマ攻略）  
第十六軍司令官・今村均（ジャワ攻略）  
第二十五軍司令官・山下奉文（マレー・シンガポール攻略）

に伝えられ、そこから各軍の師団長へと伝えられた。各軍は二、三個の師団で構成されていたのである。天皇→参謀総長→師団長という単純な命令系統では効率が悪く、師団長と天皇のあいだに三ランクの司令官を置かなければならぬほどの大きな戦争だったということである。

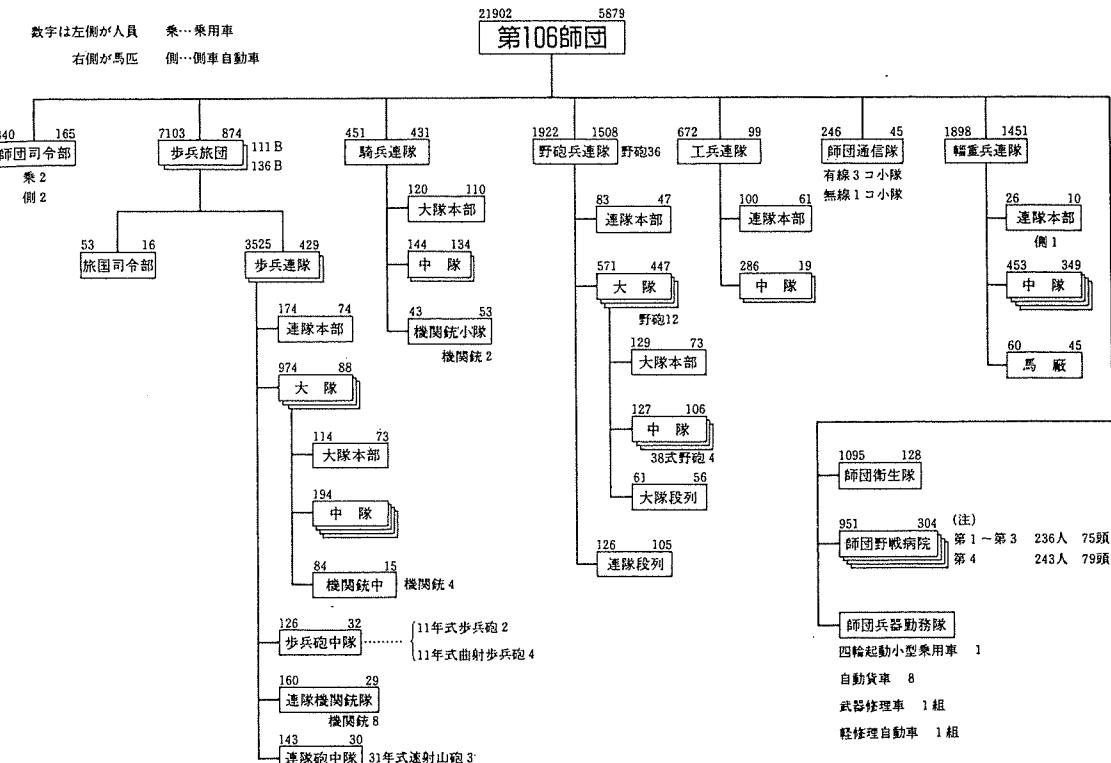


戦場には本当の意味の休息はなかった。(中国戦線)

しかし、師団長が天皇から直接任命される親補職という地位に変化があつたわけではなく、原則的には天皇からの命令を奉じて、作戦を指揮したのだった。

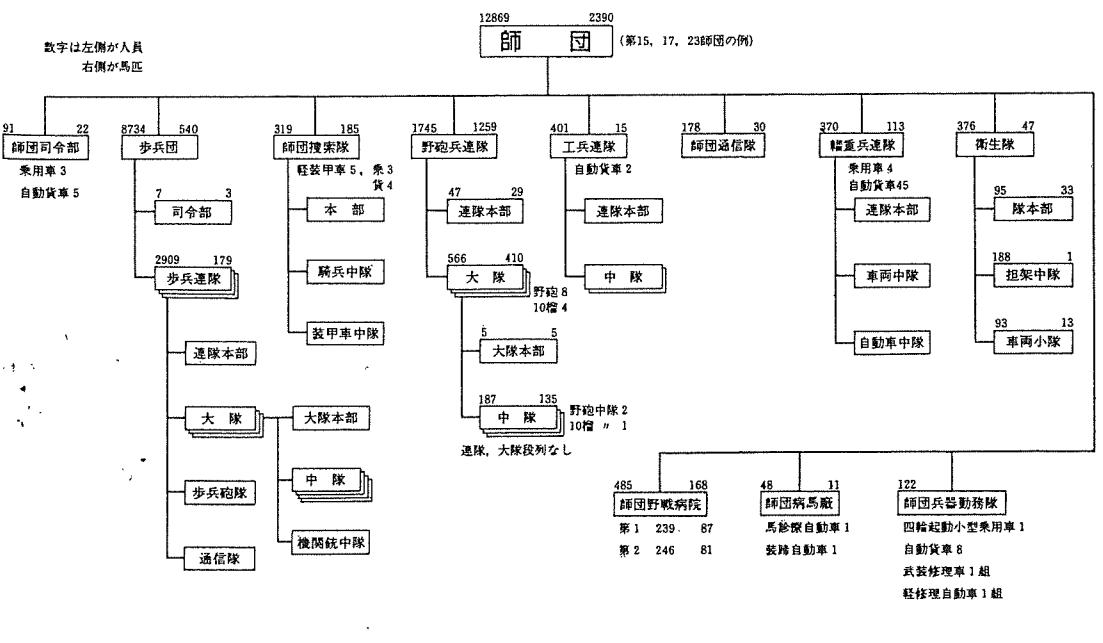
太平洋戦争ではほとんどの戦線で敗れてしまった多くの師団長（や軍司令官）が天皇に対する申し訳なさで恐縮したが、そう思うだけではなく、自裁して己の非力を詫びた人も少なくなかつたのである。

### (2) 日中戦争に動員された特設師団の編制

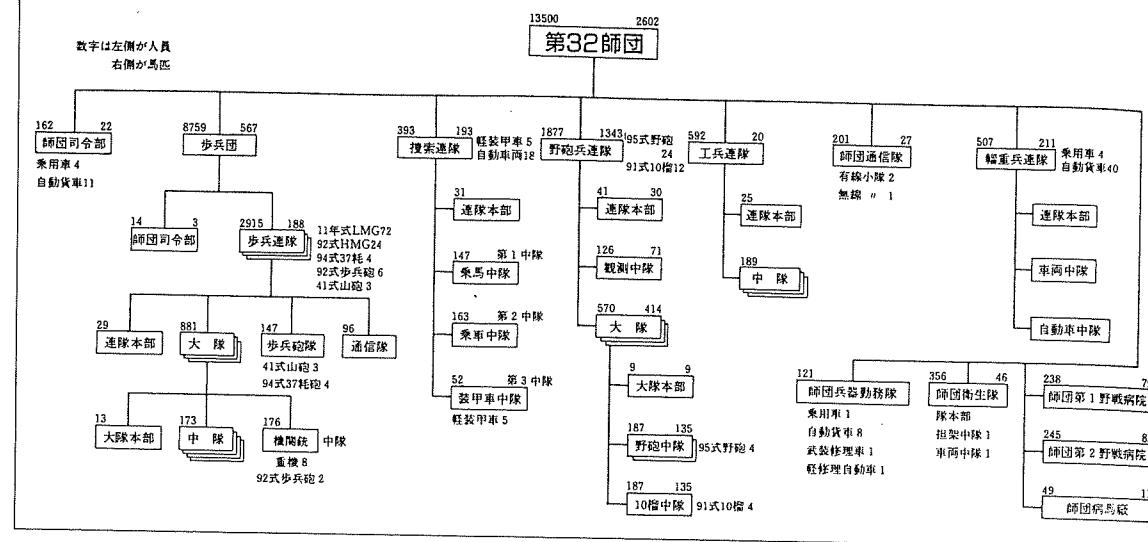


(表2、3) 上も下も、日中戦争で召集兵を中心に急速編成された師団の例。人員も火力も常設師団に比べると小規模であった。

### (3) 3単位(3個歩兵連隊)編制の兵力



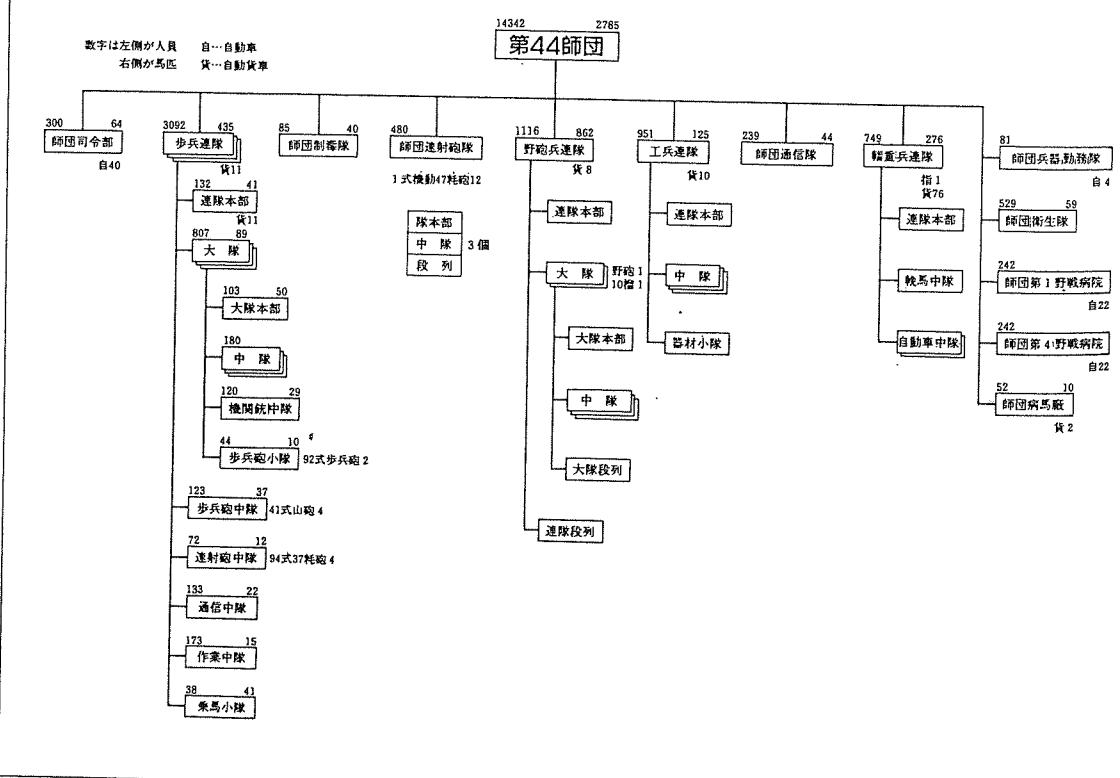
## (5) 中国の占領地警備に当たった治安師団の例



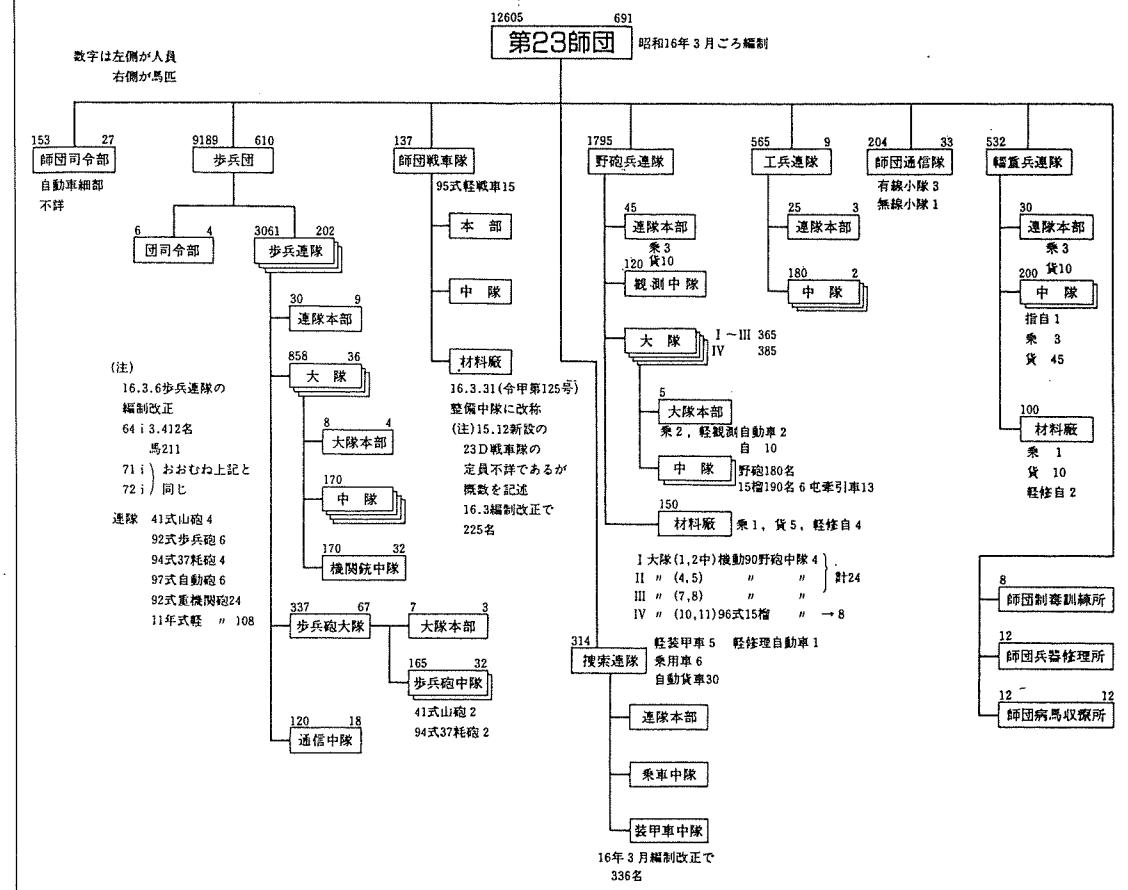
(表5) 日中戦争が一段落し（日本側からみての話だが）、占領地の警備・治安が必要になった。そのとき各地に駐屯させるために編成された例がこの師団で、治安師団と俗称されたもの。約7個師団編成された。人員も馬匹も平時編成並の兵力である。野砲兵連隊を持っているが、大きな戦闘は必要ないという理由で、のちに外された。

(表6) 40番代師団の一つで、4単位師団から3単位師団に改編した際、余剰連隊をもって独立歩兵團を編成したが、第44師団のみは留守第4師団をもつて編成した。師団は19年に勤員下令で再度留守第4師団を編成し、第51軍（茨城県正面担当）の戦闘序列に編入され、鹿島灘正面の防衛を担当した。

## (6) 留守師団を基幹として編成された師団



## (4) 装備を思い切って充実した師団の例



(表4) 第23師団は昭和14年のノモンハン事件を戦った中核だったが、ほとんど全滅に近い損害を受け、師団長は予備役編入となった。その師団を昭和16

年春に再建したのがこの表で、師団としては初めて戦車部隊が組み込まれるなど、いわゆる機械化部隊としてのモデルケースともなった。

**師団長と兵隊**

師団長というのは兵隊にとつては雲の上の存在である。自分にとつては最高指揮官だから名前は覚えなければならないことだが、仮に師団長が私服でお供もつれずに不意に第一線に現れても、師団長とわかる兵隊は少なかつた。

師団というのは平時でも一万人を超す大所帯であるし、戦時ともなると一、三倍の二万五千にも三万五千にも膨れ上がる組織だった。実際に戦闘に従事する師団もあれば、占領地の警備・治安を担当する師団もあり、あるいは戦車部隊や砲兵部隊に重点を置いた師団もあってその兵力や戦力はさまざまだったが、少なくとも一万人を下回るよ

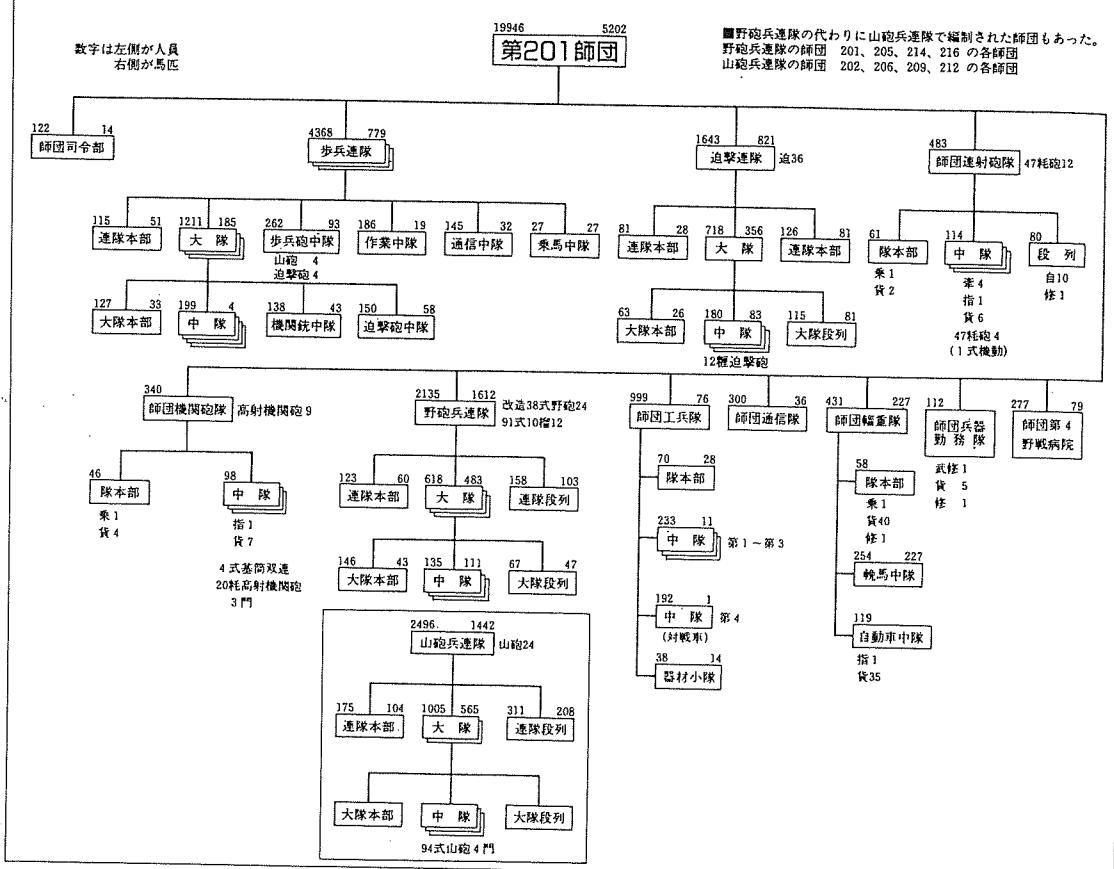
うな師団はなかつた。

そのうえ、今日のように写真やテレビがあるわけではない。軍事機密という壁もあつて、やたらに高級指揮官の顔写真を印刷するというわけにいかなかった。

昭和十一年二月二十六日に、いわゆる一二六事件が起り、首相官邸を襲った一隊は岡田啓介首相を暗殺したが、じつは良く似た私設秘書官だった。首相の顔といえども見間違えるほどに、顔写真は流布していなかつたのである。

平時にあつても師団というのはふつう（日中戦争直前までは）一、二、三県に一つしかない。師団司令部が置かれている場所は決まっている。指揮下の各部隊は連隊ごとに分散配置され、連隊本部の位置も決まっている。司令部付きの兵隊でもない

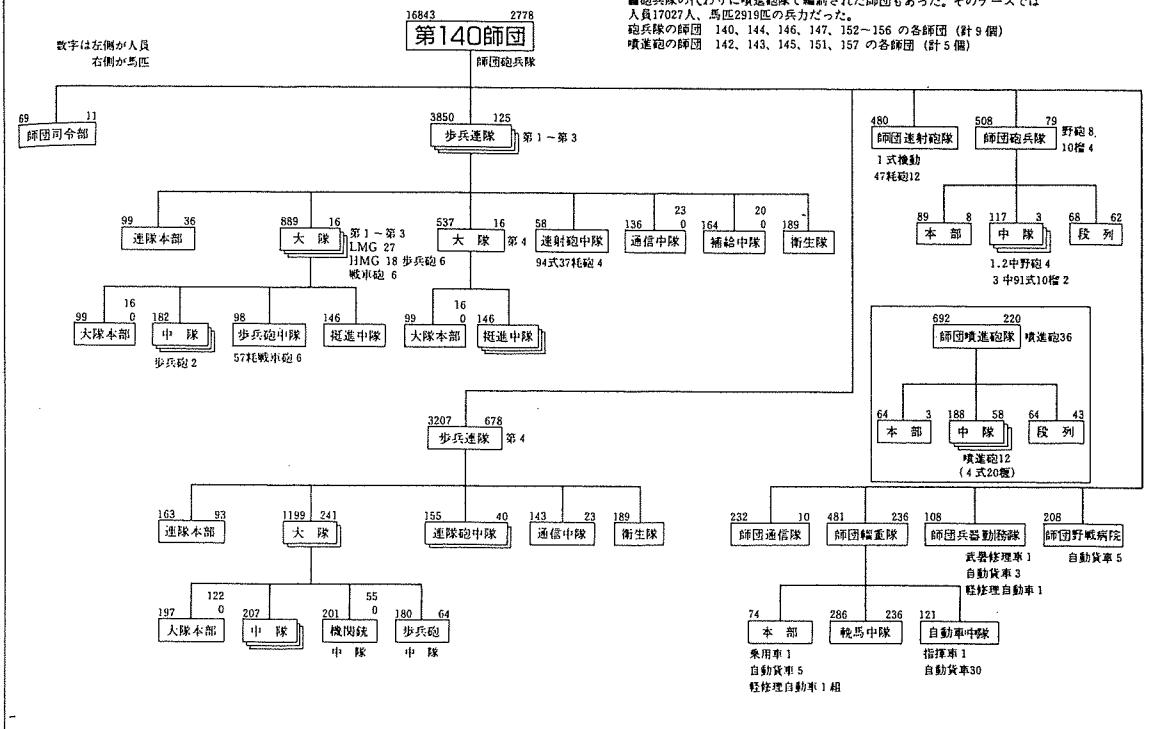
## (8) 本土決戦に備えた機動(決戦)師団の例



(表8) 本土決戦用に編成された師団だが、海岸より少し奥地に配置され、敵上陸の報とともに機動を開始して上陸地点にかけつけ、決戦を挑む任務を持っていた。その駆けつけるまで敵を釘付けにして

くれるはずの師団が、前頁の張りつけ師団である。表のうち、乗=乗用車、指=指揮車、貨=自動貨車、修=修理自動車、武修=武器修理車である。

## (7) 本土決戦に備えた沿岸張り付け師団の例



(表7) 太平洋戦争が連合軍の大反攻で押しまくられ、いよいよ本土に上陸してくるという事態を覚悟して、本土決戦用の師団が数多く編成された。上の表はその中でも上陸予想地点の海岸沿いに配置するため編成された師団の例で、14個編成され、張りつけ部隊と称された。

形のうえでは人員約2万人でさまざまな部隊が編入されているが、実際には小銃も不足するという事態のなかで、兵隊もほとんど元気な者は根こそぎ召集して編成されたのが実情だった。

米軍が上陸してから、爆雷を抱いて戦車の下に突っ込み、小銃なきものは竹槍で米兵と刺し違え、最低2時間は海岸に釘付けすることを命じられた師団である。砲部隊も、日清戦争や日露戦争に用いたような旧式の大砲を倉庫から引っ張りだして持っていたケースもある。

張りつけ部隊というのは悲しい響きを持つが、それが現実だった。

## 戦時動員と兵隊

かぎり、師団長の顔を身近に仰ぐチャンスはほとんどなかった。  
ましてや一個師団が戦場に投入されるととも、師団長は数十キロも後方の師団司令部に位置しているのがふつうで、これまた普通の兵隊には縁遠い存在だったのだ。

国民皆兵といつても、徴兵検査で合格した者がすべて兵隊になる（なれる？）わけではなかった。昭和十二年の支那事変が始まる前までは、師団の数は十七個だった。だから、徴兵検査をしても甲種格になるのは全体の三十パーセントだったが、実際に入営できたのはその半分程度だった。全体

の合格者（合格者は甲種のはか乙種（第一、第二）、丙種）からみると、わずか十五パーセントに過ぎない。

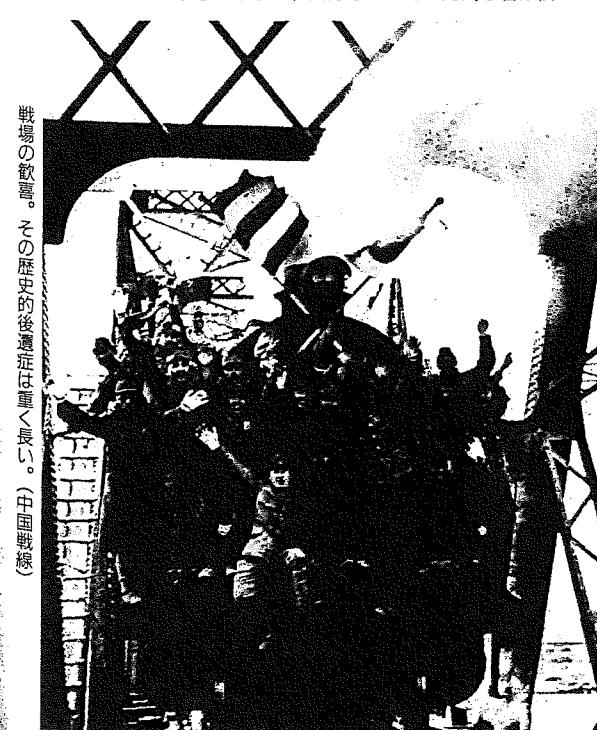
後は、いざ鎌倉という事態に備えて大部分は在郷軍人に組み込まれた。健康の度合いや年齢によって、徴集する順番が決められていたし、それぞれのランクによって年限というものも決まっていた（100頁参照）。

ところが、日中戦争から太平洋戦争開始までの四年間に、師団の数は五十一個にも増えた。当然兵隊が多く必要になった。兵隊検査で合格した者のうち第一乙種はもちろん、第二乙種までが現役兵となり即入営となつた。兵隊検査を受けた者の五十一パーセントである。

さらに昭和十七、八年になると、同じく六十分の一セントが、昭和十九、二十年になると九十パーセントが現役兵として入営した。かつてNHKの「トンチ教室」で、青木先生として人気があったアナウンサーは、言われるままに両手の指を曲げては伸ばしたら“合格”だったそうだ。

そのほか予備役、後備役あるいは国民兵といふ年齢の高い、後詰めの者が続々として召集された。大戦末期になると根こそぎ動員ということが言われたが、四十歳までの男子で兵役に耐えられそうな者はほとんど召集された。

水膨れした師団の兵力が低下したことはもちろんだが、あまりにも膨大な数の兵隊に、唯一戦う武器である小銃すら全員には行き渡らなかつたのである。



# 師団長は中将、中隊長は大尉

兵隊がもつとも身近に接する隊長は中隊長である。原隊のもつとも大きな単位・師団長ははるかに仰ぎ見る存在だった。

## 将校と下士官兵

軍隊は、将校・下士官・兵の三つの階級層から構成されていた。最上級の大将から二等兵まで十七階級があった。上から示せば、

◇大將・中將・少將（以上將官）

◇大佐・中佐・少佐（以上佐官）

◇大尉・中尉・少尉（以上尉官）

◇准尉・曹長・軍曹・伍長・兵長（以上下士官）

◇上等兵・一等兵・二等兵（以上兵、兵隊とも）

である。

将校は、将校・下士官・兵の三つの階級層から構成されていた。最上級の大将から二等兵まで十七階級があった。上から示せば、

◇大將・中將・少將（以上將官）

◇大佐・中佐・少佐（以上佐官）

◇大尉・中尉・少尉（以上尉官）

◇准尉・曹長・軍曹・伍長・兵長（以上下士官）

◇上等兵・一等兵・二等兵（以上兵、兵隊とも）

である。

将校・下士官兵という言い方があるが、これは将校（大将から少尉まで）の大部分が陸軍士官学校など特別の将校養成学校で最初から指揮官になるための教育を受けたからである。兵隊としての経験はない特別のエリートである。

これに対して、下士官兵は下士官（准尉から兵長まで）と兵隊（上等兵から二等兵まで）と一緒にした言い方である。下士官は兵隊として一定期間訓練された者が昇進したり、さらに上級の下士官になるために選抜されて陸軍教導学校、後には予備士官学校の乙種幹部候補生として教育された者が任命された。

う地位でもあった。どちらかといふと本質的には下士官であった。

准尉は中隊事務の実質的な指導者で、とくに兵隊の人事にも係わった。准尉ににらまれたらいつまでも苦労のおおい勤務につかされるのだった。

だから兵隊は准尉を“兵隊元帥”と俗称して畏敬した。兵隊の苦労は一通り分かっていたし、兵隊の心情に通じていたからだ。一方では、将校集会所にも顔を出せるポストにあり、軍服などは他の将校同様に自弁であったが、官僚としての地位は少尉以上が奏任官であるのに対し一ランク低く、

陸軍はいわゆる部隊と、陸軍省・参謀本部・教育監督部などの役所（官衙と難しく表現していた）との大きな組織で成り立っていた。役所に勤務するのはすべて将校であって、下士官兵が勤務することはなかった。将校であっても、陸軍大学校を卒業しないと、そういう役所に勤務することはなかった。エリート中のエリート将校は役所と部隊のあいだを相互に交代で勤務した。

とにかく将校と下士官兵とは画然と分かれた階級であった。早い話が、兵隊を手取り足取り実際に教育訓練するのは下士官であって、将校はその方針を示すのみである。方針とはいっても、細かく書かれた典範というものがたり、それにのつとつているかどうかを点検するぐらいのものであつた。のつとつていなければ、下士官に命令してやり直させるのである。

だから、太平洋戦争の戦局が傾いてきて将校の最下級である少尉などが、いきなり戦場で指揮をとらされるという事態が起つても、たいていは事情がわからず、古参の下士官である曹長や軍曹が実際の指揮をとつたという例は枚挙に暇がない。役所勤めの高級将校であつても、だいたい似たようなものであつた。

だから、太平洋戦争の戦局が傾いてきて将校の最下級である少尉などが、いきなり戦場で指揮をとらされるという事態が起つても、たいていは

こと、このうち准尉・曹長は別格だった。第一、このクラスになると兵隊を直接教育することはほとんどなかつた。つまり衛兵勤務から除外されていた。しかも長靴をはき、長剣をぶら下げることが許された。連隊本部にでかけて命令を受領する、それを中隊本部に伝達するという役割のほか、經理事務や兵器、被服などの実務に当たつては、准尉がいつも接していたのは、准尉・曹長以下の伍長・兵長などだった。

准尉は特務曹長と呼称されていた時代が長く、准尉となつたのは昭和十四年のことである。兵隊からのたたき上げで、軍隊生活一、三十年というお化けみたいな存在であった。准士官とも呼ばれ、最下級の将校であるが、下士官の最上級者とい

う他の下士官と同様に判任官であつた。

**二、三千人を指揮した連隊長**

将校は三つのグループに分かれる。第一は尉官である。上から大尉・中尉・少尉である。

大尉や古参の中尉が中隊長で、中隊付将校として少尉や見習士官は建前上は初年兵教育の教育であり、馬・兵器・練習用具・天幕などの陣営具・被服などの業務を担当したが、実際の業務は曹長や軍曹が取り仕切つた。

見習士官は少尉の卵である。士官学校や予備士官学校、あるいは各兵科の実施学校（詳細は八〇頁参照）を卒業して、曹長となつた者が見習士官となり、それぞれの中隊に派遣される。数ヶ月の隊付教育のあと、少尉に任官する。

次が佐官である。上から順に大佐・中佐・少佐である。

連隊長は大佐であり、大隊長は中佐であつた。輜重兵連隊や工兵連隊には中佐が任命されること多かつた。歩兵連隊は平時で約二千人、戦時では三千五百人から四千人の規模である。

それにくらべると、輜重兵連隊や工兵連隊は規模が小さかつたのである。

中佐や少佐は、連隊本部の副官となつたり、師団司令部の參謀などをつとめた。連隊には連隊長を始めとして佐官クラスは数名しかおらず、兵隊にとっては大佐の連隊長はもちろんのこと、佐官という将校も滅多にお目にかかる雲の上の存

## 下士官でも准尉・曹長は別格

数としては兵隊がもちろん圧倒的に多いが、これは上から上等兵・一等兵・二等兵の三ランクである。初年兵が二等兵、二年兵が一等兵、二年兵のなかの優秀な者が上等兵というのが、平時の一般的な場合である。

戦争になると、戦場での働きぶりや経験年数によつて、昇進することもできた。上等兵は兵長や伍長という下士官に進むこともあつた。軍曹や曹長になるには、選抜されて特別の養成学校に送り込まれ教育を受けたが、よほど優秀でないと昇進できなかつた。

下士官とは上から順に准尉・曹長・軍曹・伍長・兵長である。

このうち准尉・曹長は別格だった。第一、このクラスになると兵隊を直接教育することはほとんどなかつた。つまり衛兵勤務から除外されていた。

しかも長靴をはき、長剣をぶら下げることが許された。連隊本部にでかけて命令を受領する、それを中隊本部に伝達するという役割のほか、經理事務や兵器、被服などの実務に当たつては、准尉がいつも接していた。つまり、兵隊がいつも接していたのは、准尉・曹長以下の伍長・兵長などだった。

准尉は特務曹長と呼称されていた時代が長く、准尉となつたのは昭和十四年のことである。兵隊からのたたき上げで、軍隊生活一、三十年というお化けみたいな存在であった。准士官とも呼ばれ、最下級の将校であるが、下士官の最上級者とい



将校らが命じ、兵隊が力を出す。（中国戦線）



中国軍の青龍刀等をもつて記念写真（中国戦線）



陸軍の大御所だった山県元帥



寺内元帥。父・正毅も元帥だった。



対英米戦を指導した杉山元帥。

## 元帥は最高軍事顧問

元帥は階級でなく称号である。もともとは陸海軍の調整役だったという。

明治の建軍以来、陸軍と海軍は仲が悪かつた。当初は陸軍出身の参謀総長が海軍の分まで含めて作戦をたてていたことに原因があるといわれる。

そのせいか、のちに（明治二十六年）海軍は海軍軍令部長に一任されたが、海軍軍令部長は参謀総長の下に置かれていた。

日露戦争の始まる前に、それを同格におくという問題で紛糾したが、その調整役に元帥府を置き、「陸海軍大将の中に於て老功卓抜なる者を簡選し、朕が軍務の顧問たらしめんとす」ということでスタートした。天皇の軍事における最高顧問である。

こんな経緯があつた元帥であるが、明治三十五年に西郷従道が没してからは、当初の目

的是はまったく忘れ去られた。

元帥は終身現役であった。つまり、死ぬまで天皇の相談にあづかった。だから、軍事上 のあらゆる問題について情報を確かめ、意見を述べることができたし、批判もできた。顧問だから正式の機関決定に直接参加することはなかつたが、その影響力は大きかつた。

ついでにいえば、大将であろうとも現役でない者は、軍事上の機密に触れることができず、作戦に口をはさむことはできなかつた。そのいは例が大戦末期に首相になつた小磯国昭である。大将までなつたがすてに昭和十三年に現役を去り予備役となつていて、首相のメンバーになれず、大本営局に関してもほとんど情

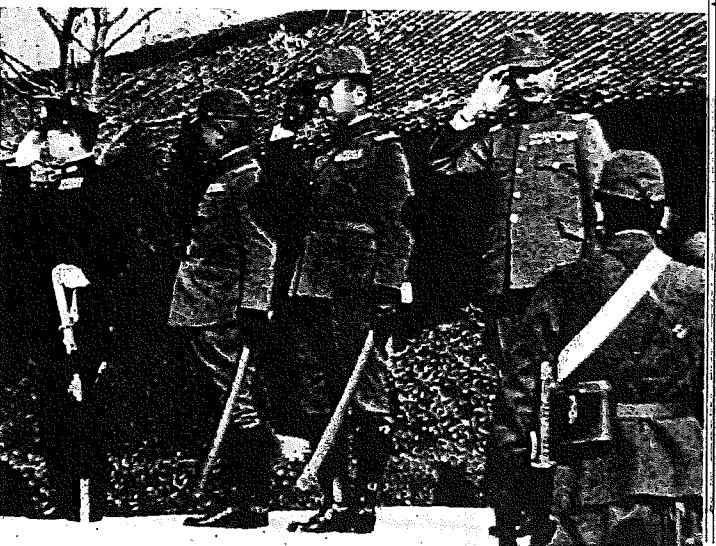
たなあ」と声をかけられたといふたつたそれだけのことを、今日でもなお「大感激であつた」と深い思いをこめて書くほどに、大変な存在だったのだある。

師団長は中将、旅団長（や歩兵団長）は少将と決まつていた。しかも、大部分が陸軍大学卒業で、同期生のなかでもエリートである。太平洋戦争が始まつたころの師団長である中将の年俸が五千八百円、旅団長である少将の年俸が五千円だった。同じころ、兵隊ではもつとも上の階級の上等兵が月額十円五十銭、年に直すと百二十六円に過ぎない。この点からみてもまさに月とスッポンである。

## 師団長という特別なポスト

将官は上から大将、中将、少将だが、大将と中将とでは雲泥の差があつた。大将が師団長になつたケースはなかつた。師団長では役不足というわけである。大将は、満州の関東軍とか、日中戦争における支那派遣軍とか、太平洋戦争時代の南方軍などのように、師団が十個も二十個も含まれるいえれば、陸軍大臣、参謀総長、教育監などいわゆる三長官（実際は中将が多かつた）である。

大将は親任官であり、中将は同じく勅任官ではあつたが親任官ではなかつた。どちらも天皇が直



右から大将松井石根、中将朝香宮殿下。昭和12年12月17日、南京入城で。

それに対しても中将までの昇進者は千二百十七人を数えた。大将の約九倍である。

ただ、中将が師団長に就くと一種独特の重みがついた。なぜなら師団長は親補職とされ、天皇が直接任命するポストだつたからである。したがつて、その地位は陸軍次官や参謀次長（ともに中将）よりも一ランク上とみなされていた。

平時には師団長になると宮中で天皇に拝謁し、激励の言葉をかけてもらえた。これこそ軍人としての最高の栄誉であつた。天皇のためにあらゆる知恵を絞り、でき得るかぎりの努力をして、「ご奉公」をあらためて心に誓つたのである。

これに対しても中将は高等官一等という位である。同等のポストとして最初から決められていたものは、宮内次官、宮内省掌典長、李王職長官だった。李王職は旧韓国の皇帝や近親者を王公族として、それぞの家務を扱うところで、日本の宮内省のようなものである。京城に置かれ、朝鮮総督府の監督下にあつた。

要するに大将は一種特別な階級で、明治六年の西郷隆盛以来、わずかに百二十四人（没後進級七人を含む）が進級したに過ぎない。没後昇進も含めて一番若い大将は鈴木宗作（24期、没後）で、そこまでの陸士卒は一万三千四百四十二人であった。そのうち大将となつた者は九十一人で、一パーセントに満たなかつた。

それに対して中将までの昇進者は千二百十七人を数えた。大将の約九倍である。

ただ、中将が師団長に就くと一種独特的の重みがついた。なぜなら師団長は親補職とされ、天皇が直接任命するポストだつたからである。したがつて、その地位は陸軍次官や参謀次長（ともに中将）よりも一ランク上とみなされていた。

平時には師団長になると宮中で天皇に拝謁し、激励の言葉をかけてもらえた。これこそ軍人としての最高の栄誉であつた。天皇のためにあらゆる知恵を絞り、でき得るかぎりの努力をして、「ご奉公」をあらためて心に誓つたのである。

## 陸軍大将から元帥になった軍人

氏名	親補年月日	死亡年月日
小松宮彰仁親王	明治31. 1. 20	明治36. 2. 18
山縣有朋	〃	大正11. 2. 1
大山巖	〃	大正5. 12. 10
野津道貫	39. 1. 31	明治40. 9. 18
奥保鞆	44. 10. 24	昭和5. 7. 17
長谷川好道	大正3. 1. 6	大正13. 1. 28
伏見宮貞愛親王	3. 1. 9	大正12. 2. 4
川村景明	〃	大正15. 4. 28
寺内正毅	5. 6. 24	大正8. 11. 7
閑院宮載仁親王	8. 12. 12	昭和20. 5. 20
上原勇作	10. 4. 27	昭和8. 11. 8
久邇宮邦彥王	昭和4. 1. 27	同日没
梨本宮守正王	7. 8. 8	昭和26. 1. 1
武藤信義	8. 5. 3	昭和8. 7. 28
寺内寿一	18. 6. 21	昭和21. 6. 12
杉山元	〃	昭和20. 9. 12
畠俊六	19. 6. 2	昭和37. 5. 10

# 関東「軍」や朝鮮「軍」とは何か

師団の上の「軍」という組織は、関東軍や朝鮮軍など常設ものと、支那派遣軍や南方軍のような臨時のものがあった。

## 常設の「軍」とは

師団は平時の内地における最大組織であり、師団管区といふものを持ち、徵兵という仕事も受け持つていた。部隊であると共に、一種の軍政にも連結させられた常設部隊だった。



満州國をむりやり成立させた関東軍は、長春を新京と改め、天守閣を乗せた関東軍司令部を新築した。

これに對して、関東軍（在満州）や朝鮮軍、あるいは台灣軍などの「軍」という組織は、複数の師団（あるいは方面軍や第三軍というようにナンバーをふったナンバー軍）を直属（隸屬、あるいはナンバーワーク）と称した）させた大きな部隊である。これも常設部隊であつた。

日中戦争が始まるまでは上記三つのほか支那駐屯軍の計四個の「軍」があつた。それぞれの長は軍司令官と呼称され、中将か大将が親補、つまり天皇から直接任命された。

その兵力は、

- 関東軍（司令部 新京〔現在の長春〕） 四個師団
- ・二個独立混成旅団・五個独立守備隊・騎兵集団
- （二個騎兵旅団・騎兵砲兵隊・騎兵装甲車隊など）
- 一個騎兵旅団・野砲兵、山砲兵連隊各一など。
- 朝鮮軍（司令部 平壤） 二個師団
- 台湾軍（司令部 台北） 二個歩兵連隊・山砲兵連隊・二個重砲兵連隊・高射砲隊など
- 支那駐屯軍（司令部 天津） 步兵旅団・戰車隊
- ・騎兵隊・工兵隊など。

などであった。台湾軍と支那駐屯軍以外は複数の師団を含んでいることがわかる。

朝鮮軍と台湾軍は日本の植民地である朝鮮と台湾で睨みをきかしていた軍隊である。関東軍は満洲國をむりやり成立させた軍隊である。関東軍司令部（將校百十九名）の守備兵を置く権利を獲得したことにつまっている。



中国の漢口の街を進む中支那派遣軍司令官畠俊六（先頭）。まだ、支那派遣軍はできていなかった。

## 戦争のため臨時に編成された「軍」

戦争になると戦闘を行うために臨時に「軍」が編成された。同じ「軍」でも関東軍や朝鮮軍、台湾軍とは性格が異なっていた。遠くは日清戦争における第一、第二軍、日露戦争における満州軍（第一、第三軍）がある。戦争が終わると解隊され、戦争中でも状況に応じて解隊された。

支那派遣軍は日中戦争（支那事変）の最中に編

成した。関東軍司令部自身も、司令部要員のほかに三個師団ほか関東軍防疫給水部（いわゆる七三一部隊として細菌戦の研究をしていたことで有名）や旅順要塞司令部を直属させていたが、その他の部隊は五個の軍（第三、六軍、第二十軍）と二つの司令部（関東防衛軍司令部、航空兵团司令部）に分割指揮させた。

出発時の関東軍（満洲駐留軍。関東軍と改称されたのは大正八年）は單なる鉄道守備が任務の小さな「守備隊」だったが、満州事変をきっかけとし、さらには日中戦争が長引いてきた頃から、戦闘任務も与えられて大きくなつた。関東軍が戦うべき相手とはソ連軍だった。

満州国は事実上の植民地だったが、朝鮮や台湾は日本の領土に編入されていた。したがつて朝鮮軍と台湾軍の二つの「軍」の目的はそこの治安を維持すること、つまり日本の支配を覆そうとする動きを封じるためにある。両方とも総督という行政責任者を別に置き、総督の要請を受けて治安のために出動することができるようになつていて了。

成され、終戦まで続いた「軍」である。

昭和十二年七月七日の蘆溝橋事件勃発以来、幾つかの「軍」が編成されては目まぐるしく改編された。

まず上海派遣軍が編成されて出動したが、続いで支那駐屯軍が格上げされて北支那方面軍になつた。続いて第十軍が編成されて杭州湾上陸作戦を実施した。さらに上海派遣軍と第十軍を合わせて中支那方面軍が編成された。これは三カ月後（昭和十三年二月）には中支那派遣軍となり、上海派遣軍や第十軍は解隊された。こうしてしばらくは北支那方面軍と中支那派遣軍が同じ資格で戦いを続けた。兩者を統括する「軍」が編成されたのは昭和十四年九月で、これが支那派遣軍である。このとき、北支那方面軍はそのままで、中支那派遣軍は解隊となつた。

このように戦争のために臨時に編成された「軍」というものは、状況に応じていつでも改編されたり統括されたり解隊される性格をもつた組織でもあつた。とくに日中戦争（支那事変）はその当初から戦争の目的がはつきりせず、したがつてどこまで戦線を伸ばすのか、どこまで攻略するのか、どの程度動員するのか、いつ兵を退くのか、まったく当てがないまま進んだため、相当の混乱が生じた。あれほどの大戦争をしかけながらまるでウソのような話である。「軍」編成の変遷がそれを物語ついている。

支那派遣軍の編成によつてようやく大本営の日中戦争に対する一定の方針が定まつたといわれる。すでに武漢三鎮（武昌、漢口、漢陽の三都市。現在は武漢市）や廣東を攻略占領していくが、それ以上は攻略するのは無理とみて、大軍を各占領地にそのまま駐屯させて、持久戦に持ち込むというのであった。その兵力は、

- ・北支那方面軍、
- 第一軍 四個師団、三個独立混成旅団
- 第二軍 二個師団、三個独立混成旅団
- ・第十一軍 七個師団、一個独立混成旅団
- ・第十二軍 二個師団、三個独立混成旅団
- ・第十三軍 一個師団、一個独立混成旅団、騎兵集団
- ・第二十一軍 二個師団、一個混成旅団
- ・第三飛行集團（後の第三飛行師団）

州事変を起こして満州國を誕生させ、そのまま満州國に駐屯し、事実上の支配者だつた。支那駐屯軍は北清事変（義和團の乱、明治三十三年の際、歐米列強と共同出兵して、事変後に列強とともに駐屯することになつた軍隊である。

## 最初は満鉄の警備が目的だった関東軍

関東軍のスタートは、日露戦争の結果ロシアから譲り受けた南満州鉄道いわゆる満鉄（旅順→長春間など）の警備が目的だった。満鉄沿線には一キロメートルにつき最大十五名（計一万四千四百十九名）の守備兵を置く権利を獲得したことに始まつてゐる。

そのときから一十六年後に満州事変を画策し、満州國という名目上の国家を誕生させ（昭和七年）、当然のことながら関東軍の兵力は見る見るうちに膨れ上がつた。太平洋戦争が始まつたころには師団の数は十三個だつたが、兵力そのものは七十万を超える大規模な「軍」になつていた。師団に直属しない独立混成旅団とか独立守備隊などがやたらに多く、師団相当の航空部隊なども配属されていたからである。

満州國の治安維持だけならこれだけの兵力を集めさる必要はまったくなかつたが、ソ連領に攻め入るつもりで一挙に集中させた（昭和十六年七月八月の関東軍特種演習「関特演」）。結局、対ソ開戦は見合せとなつた）からである。

これだけの大所帯だと、関東軍司令部（將校百三十名を含め約六百名）だけでは目が行き届かない。このように戦争のために臨時に編成された「軍」というものは、状況に応じていつでも改編されたり統括されたり解隊される性格をもつた組織でもあつた。とくに日中戦争（支那事変）はその当初から戦争の目的がはつきりせず、したがつてどこまで戦線を伸ばすのか、どこまで攻略するのか、どの程度動員するのか、いつ兵を退くのか、まったく当てがないまま進んだため、相当の混乱が生じた。あれほどの大戦争をしかけながらまるでウソのような話である。「軍」編成の変遷がそれを物語ついている。

支那派遣軍の編成によつてようやく大本営の日中戦争に対する一定の方針が定まつたといわれる。すでに武漢三鎮（武昌、漢口、漢陽の三都市。現在は武漢市）や廣東を攻略占領していくが、それ以上は攻略するのは無理とみて、大軍を各占領地にそのまま駐屯させて、持久戦に持ち込むというのであった。その兵力は、

- ・北支那方面軍、
- 第一軍 四個師団、三個独立混成旅団
- 第二軍 二個師団、三個独立混成旅団
- ・第十一軍 七個師団、一個独立混成旅団
- ・第十二軍 二個師団、三個独立混成旅団
- ・第十三軍 一個師団、一個独立混成旅団、騎兵集団
- ・第二十一軍 二個師団、一個混成旅団
- ・第三飛行集團（後の第三飛行師団）

などのほか、通信隊、鉄道部隊、気象部隊、兵站関係部隊、憲兵隊などである。兵力を人員からみると七十万に近い大部隊であった。これを支那「軍」があるので、その司令部や司令官との区別をつけるために、支那派遣軍總司令部、總司令官などと呼称するようになった。そして単に「軍」というよりも「總軍」と呼んだのである。

總司令部や總司令官と呼称したのは、太平洋戦争で南方作戦を指揮した「南方軍」、大戦末期に内地に編成された第一總軍、第二總軍も同様であった。関東軍は前述したようにもともとこういう「軍」とは経歴も性格も異なっていたが、昭和十七年十月には總司令部と呼称し、同十九年四月からは總司令官と名乗るようになつた。

### 太平洋戦争で続々生まれた「軍」組織

太平洋戦争の「南方軍」は、緒戦においてマレーラ・シンガポール、フィリピン、ジャワ、ビルマを攻略する總軍として設置された。みずからは航空部隊を直接指揮し、直属の第十四軍、第十五、第十六、第二十五軍の四個軍團を持つていた。

それが末期になると、四個方面軍・二個航空軍・一地区集團（パラオ地区集團）を統括した。方面軍を構成しているナンバー軍は、

第七方面軍（シンガポール）||第十六、第二十

五、第二十九軍

第十四方面軍（ルソン島）||第三十五、第四十

などのほか、通信隊、鉄道部隊、気象部隊、兵

站関係部隊、憲兵隊などである。兵力を人員から

みると七十万に近い大部隊であった。これを支那

「軍」があるので、その司令部や司令官との区別

をつけるために、支那派遣軍總司令部、總司令官

などと呼称するようになった。そして単に「軍」

というよりも「總軍」と呼んだのである。

一軍

第十八方面軍（バンコク）||第十五、第二軍、

第十八、第三十七、第三十八軍などである。

これらの軍のなかには、第四航空軍や第三十五軍、あるいは第十八軍のように、ほとんど壊滅状態の小規模部隊と化しているものもあつたが、ともかく南方軍だけでもこれだけの「軍」を抱えていたのである。

太平洋地域にはそのほかラバウルの第八方面軍、台湾の第十方面軍、トラック（マリアナ地区）の第三十一軍、硫黄島の小笠原兵團などが大本營の直轄として一部が生き残つていた。

関東軍も末期には三個方面軍を編成し、七個軍を分割して直属させていた。支那派遣軍は九個軍を二方面軍で指揮していた。

内地には太平洋戦争開始のころ六個軍が置かれていたが、本土決戦のために第一總軍（東部地区担当）、第二總軍（西部地区担当）、航空總軍をおいた。そして、第一總軍が二個方面軍（計八個軍・兵團）、第二總軍が二個方面軍（計五個軍）、航空總軍が四個航空軍を直属させ、全軍玉碎の態勢を整えていたのだった。航空軍も地上軍も本氣で玉碎するつもりだったのである。

連合軍の九州上陸は昭和二十年十一月一日と予定されていたから、ボツダム宣言を受諾しなければ間違いなく、果てし無い玉碎戦が戦われたことであろう。

「總軍」といふ「軍」というのは、要するに大規模な戦闘を戦い易くするための臨時の組織だった。

### 独立混成旅団

満州事変（昭和六年九月十八日勃発）ごろか

ら師団の分派方式として、一時的に混成旅団

を編成して戦場に派遣した。ふつう旅団とい

えば歩兵二個連隊である。それに騎兵・砲

兵・工兵の各隊を配属したから混成旅団と呼

んだ。一個師団を送るほどではなかったので、

臨時の措置がとられたわけである。

戦闘が一段落した昭和九年になると、正式

編制の小型師団として、独立混成第一旅団、

同第十一旅団を派遣した。

独混第一旅団は、戦車二個大隊（のち連隊

に改編）を持つ日本最初の機械化兵团だつた。

独混第十一旅団は、野砲・山砲の各一

個大隊を伴つた火力重視の野戦旅団であつた。

すなわち、本部・独立歩兵大隊五

（独立して戦闘能力を持つ）・旅団砲兵隊（野砲あるいは山砲の二、三個中隊）・旅団工兵隊・旅団通信隊からなり、

約五千人の兵力だつたが、満州派遣の

独立混成旅団で師団を編成（24個師団）				
師 团		独立混成旅団		
編成年月日	名 称	編 成 地	名 称	編成年月日
12.9.30	26	北 支	11	9.10.11
	58	中 支	18	14.11.7
	59	北 支	10	14.1.14
	60	中 支	11	リ
	68	リ	14	リ
	69	北 支	16	リ
	70	中 支	20	15.11.30
17.2.2	62	北 支	4	13.2.10
	63	リ	6	14.1.14
			15	14.7.22
	64	中 支	12	14.1.14
	65	リ	13	リ
18.5.1	100	比 島	30	18.11.16
	102	リ	31	リ
	103	リ	32	リ
	105	リ	33	リ
	115	北 支	7	14.1.14
19.7.10	66	台 湾	46	19.5.3
20.1.16	123	北 满	73	20.1.4
20.2.28	89	南 千 島	43	19.4.12
			69	19.7.29
20.4.12	129	南 支	19	15.11.30
	130	リ	リ	リ
20.5.23	321	伊豆大島	65	19.7.12
20.7.10	134	西 東 安	77	20.1.16
	135	佳 木 斯	78	リ

年月日は昭和

独立混成旅団を師団に改編する動きは、太平洋戦争勃発にともなつて加速された。戦場の拡大に伴つて生じた兵力不足を補うためである。緒戦の南方攻略作戦のため、中国に在つたが誕生した。

この師団は丙師団とも治安師団とも呼ばれたが、その構成は、歩兵旅団二、独立歩兵大隊八、師団工兵・通信・輜重隊などからなる約一万二千人だった。

在來の独立混成旅団を基幹に不足分は内地から兵力を増強して編成した。その数は、七年六個、十八年四個である。

その後、フィリピン、満州、本土でも同様な独立混成旅団を基幹とする師団改編が実施され、中国でのそれと合わせて二十四個師団



太平洋戦争緒戦でジャワを攻略し、蘭印軍（左側）を降伏させたのは今村均中将の率いる第16軍（右側）で、その上に總軍としての南方軍があった。

# 参謀・参謀長・参謀総長

参謀はわりに現在でも普通に使用される言葉だが、陸軍では軍のエリート集団だった。参謀総長ともなると絶大なる権力を振るつた。

## 参謀を英訳すればスタッフ

師団以上の組織には指揮官のもとに参謀が配属されていた。一つの作戦を実施する場合の詳細を定め、それに関連した通信や兵站（物資補給など）



児玉源太郎満州軍總參謀長。大將・元帥大山巖総司令官のもとで縦横に腕をふるった。

のこと)の計画をたてる役割を担つてゐる将校である。英語に訳せばスタッフのことであり、字義通りなら指揮官の命を受けて準備を整える役回りに過ぎないが、陸軍では違つていていた。

実際の作戦を指揮し、どこそこを攻略する場合でも、最初に「攻略せよ」という命令は指揮官の名で出されたとしても、以後はほとんど参謀長の名で指示（命令）が出されていていた。

ちょうど、参謀総長が天皇の命令を「奉勅伝宣」という形で取り次ぎ、以後は参謀総長の名で具体的な指示（命令）が出されていたことと同じような構造だつた。

日露戦争の満州軍總司令官であつた大山巖大将は、知人から軍司令官として何が一番難しかつたかと聞かれて、良く知つていてることでも知らないふりをしていることだつた、と答えたといふ。組織が大きくなればなるほど、最高司令官は参謀に任せつゝきりであるのが陸軍にかぎらず日本の伝統であり、それは今日の政治やビジネス界でもあまり変わらない。陸軍でも三、四千人規模の連隊となると、参謀は置かず副官というポストに中佐クラスを配置しただけだつた。連隊長自ら作戦を練り、指示したのである。

作戦にしろ指揮下部隊の諸行動についての命令

軍司令部になると、いくつもの「軍」を束ねる司令部だから、いつそう物々しい。参謀長は總參謀長といわれ中将、その下に少将の總參謀副長を置いた。さらに高級参謀を置き作戦参謀を指揮したのである。

「軍」でも「總軍」でも、大事な局面では師団や「軍」に参謀を派遣して、意見の調整を行つたり上級司令部との意志疎通を円滑にした。師団でも連隊に派遣して同様なことを行つた。派遣参謀といふのは、いわゆる「軍」でも有名である。さも大本當からの正式な命令であるかのように指示して、大作戦に引きずり込み、大惨敗を喫したという例の一つが「リ号作戦」だつた。つまり、南海支隊を東部ニューギニアにおけるオーエンスタンレー山脈越えにポートモレスビーを攻略させるという作戦である。

実際にはこの派遣参謀が正式の命令でもないのに、いろいろとそそのかして戦闘を指導するという場面もみられた。その典型的な人物として辻政信という参謀はあるにも有名である。さも大本當からの正式な命令であるかのように指示して、大作戦に引きずり込み、大惨敗を喫したという例の一つが「リ号作戦」だつた。つまり、南海支隊を東部ニューギニアにおけるオーエンスタンレー山脈越えにポートモレスビーを攻略させるという作戦である。

一方、参謀長以下多くの参謀の意見を無視して強行し、大惨敗を喫したのが、ビルマにおけるインパール作戦であった。時の第十五軍司令官牟田口廉也中将は、猛反対した参謀長小畠信良少将の更迭を実現させて踏み切つた。このときの上級司令部はビルマ方面軍であり、そのまた上級司令部は南方軍であつたが、いずれの高級参謀も作戦に

强行に反対したが、牟田口軍司令官を翻意させることはできなかつた。

インパールのケースは、指揮官と参謀長の関係において決して間違つた選択をしたわけではなかつた。指揮官に従わない参謀長が更迭されるのは当然である。牟田口の意図を翻意させるにはビルマ方面軍司令官河辺正三中将の命令によるしかなかつたが、ついに河辺は中止命令を出さなかつた。一見無謀とも見られる作戦であつても、攻撃を主張しているかぎり、止めさせるのはなかなか困難だつたのが日本陸軍の体質でもあつた。



傷んだ靴を心配そうに見る兵隊。大本營の一参謀の指示が万に近い兵隊を準備不足のままジャングルに追い込んだ。(ポートモレスビー攻略戦)。

は参謀部でまとめられ、各部隊に必ずいる命令受領者を集めて伝達された。簡単なものは口頭で出されたが、複雑なものや地図が必要な場合は、謄写版刷りの文書として配付された。軍司令部や師団司令部には謄写版担当の兵隊が配置されていた。行軍のつど担いで運んだという。雨に濡れないように紙などは油紙でよく包んで移動したものだといふ。

連隊に参謀を置かなかつたのは参謀になるには陸軍大学校卒業者でなければならなかつたからである。連隊ごとに参謀を置いていたのでは、陸大卒がいくらいでも足りなかつただろう。それに、連隊長そのものが陸大卒でない場合が多くつた。

師団であれ「軍」であれ、その参謀長がすべての参謀を統括していた。

師団の場合はそれほど大きくはない。参謀長は大佐で、参謀には一番偉い作戦参謀があり、続いて情報参謀、通信参謀、後方参謀（兵站を担当）などがあり、たんに参謀と称され特別の役割を与えていない中尉や大尉もいた。情況によつて何でもお手伝いする参謀である。

「軍」は二、三個師団を束ねる組織だから、その

参謀部は大きかつた。実際、大きな戦争では師団単位というよりも「軍」単位で戦闘を遂行したから、実際は少将の「軍」参謀長が戦闘を指導したといつても過言ではない。参謀長のほかに高級参謀という特別の参謀があり、統いて作戦参謀がナンバースリーの地位を占めた。

関東軍や南方軍あるいは支那派遣軍などの「總軍」の高級参謀八原博通大佐だつた。砲兵力の差で言えば上陸した米軍との間には大人と子供以上の差があつたから持久戦を主張した。洞窟に身を潜め、小部隊でゲリラ的に戦うというものである。勝ち目は無論ないが、そのほうが負けるのが遅く、連合軍の本土進攻時期を遅らせることができるといふものであつた。

軍司令官牛島満中将や参謀長勇中将もいつた

んは賛成したが、堪えきれずに何回かの総攻撃を

歩兵連隊に火力装備を強化して独立戦闘能力を与える、戦車隊や海上輸送部隊を配属したのである。

西部ニューギニアのビアク島、サルミなどに派遣された第三十六師団を例にとると、要地確保連隊一個（一個連隊は人員三千百六十五人、歩兵大隊三、砲兵大隊一その他）、海上機動反撃連隊一個（人員三千九百六十四人、歩兵大隊三、大隊に迫撃砲、砲兵各一個中隊



昭和19年9月、ペリリュー島への米軍砲撃。第14海洋師団の第2歩兵連隊が玉碎。

## 海洋師団とは

ガダルカナル攻防戦に敗れたあととの連合軍の反攻作戦は予想以上に早かった。そこで大本営は、昭和十八年九月、絶対国防圏設定を中心とする戦争指導の大綱を決定、中部、南部太平洋方面の防備を固めようとした。このとき誕生したのが海洋師団（海洋編制師団）である。

同じ参謀でも、参謀本部と参謀総長は別格である。参謀本部は陸軍全体の作戦をたてるところである。その参謀本部を統括するのが参謀総長で、大将か中将が天皇から直接任命（親補）された。参謀本部は国防という広い立場から、どこを仮想敵と定めるべきか、そのためにはどんな軍隊ををどれぐらい育てたらいいか、どこに部隊を配置しておけばいいか、事前にどんな情報収集活動をやるべきか、いざ戦争になつたらどんな方法で軍隊を輸送したらいいのか、どんな参謀を育てるべきかということを研究し、決定し、実施していく機関であった。

また、作戦に必要な地図（兵要地図）を整えたり、必要な参謀将校を教育するのもその任務だった。陸軍士官学校や陸軍幼年学校が教育総監部の管轄にあるのに対しても、陸軍大学校が参謀本部の管轄下にあつたのはそのためである。同様に諜報を担当した第一部に兵要地図を担当する第五課をおき、陸地測量部を直属させていた。

もつとも、その国防意識が高じて、ついには本来なら議会や内閣が決めるべき国家全体の政策・進むべき道如何という、いわゆる国策そのものまで係わろうとした。満州事変以後の参謀本部は、

敢行し、一挙に戦力を落としていった。いざれが正しかつたどうかは別として、参謀たるもの守りを中心とする戦術はとつてはならないことだったのである。

## 参謀本部と参謀総長

いわば陸軍省と結託する形で、あまりにもそのことに深く係わりすぎた。

それを可能にしたのは、やはり参謀本部の組織上の性格に由来していた。

すなわち、参謀本部は天皇に直接隸属している機関だった。軍隊のことを決定する（高級将校のボストに至るまで）権限、軍隊の行動に関する権限、兵力を決める権限はすべて天皇にあった。憲法第十一と第十二条である。

第十一條は「天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス」という簡単な文章だが、「統帥」に込められた内容はとてもなく大きく、要するに軍のことならすべて、という意味である。そして参謀総長がこれを扱つた。（第十二条は「天皇ハ陸海軍ノ編制及常備兵額ヲ定ム」で陸軍大臣の所管となつていた）

政府に相談することなく、参謀総長は（陸軍大臣と同様に）天皇に直接会つて、これこれのために軍隊を出動させたい、あれこれのためにこんな人事をしたいなどと言える立場にあつた。政府が

知らぬうちに軍隊を動かそうと思えばできただ。これを統帥権の確立と呼んだ。これを四角四面に解釈すると、天皇親政ということになる。

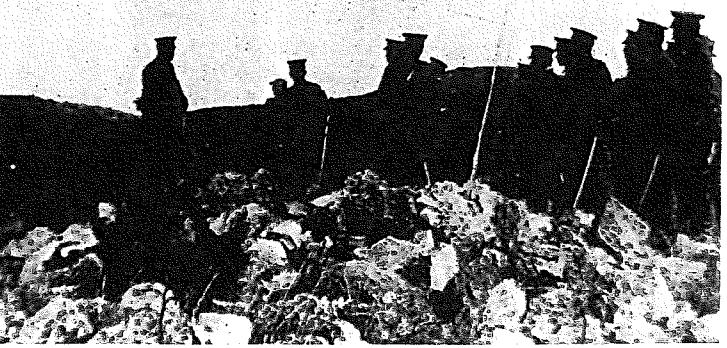
事実、昭和初期の軍縮をめぐって、政府が軍縮に関する条約を結ぶのは統帥権を犯していると騒ぎ立て、神聖なる天皇大権に触れるとは何事かと、まるでお門違いの主張を行つた。政府も識者もジャーナリズムも、それがいかにこじつけで屁理屈であるかという論理を展開することができなかつた。大日本帝国憲法は、そくならないための明確

な規定に欠けていたからである。

しかし一方では、憲法の定めるところは天皇はいわば「君臨されども統治せず」であつて、天皇親政ではないということが常識となつていたのである。武力による満州領有の作戦に備えた実地検討だつた。関東軍司令部の北満參謀旅行。北満とは満州北部の意味である。

上陸部隊に対して奮戦敢闘したもの、スンバ島・チモール島とトラック島派遣以外の四個師団は大半が玉碎した。

参謀総長というのはそういうきわどい立場にある、天皇の参謀長であつた。



海洋師団に改編、派遣先等一覧表

師団名	海洋師団に改編		派 遣 先		步 兵 連 隊 の 配 置 等
	時 期	場 所	場 所	上級部隊	
第36師団	昭和18.10.20	中 上 海	西部ニューギニア	第19軍の ち第2軍	222. ビアク島(玉碎) 223. サルミ 224. "
第46 "	"	熊 本	スンバ島 (終 戰) (マレー)	第16軍の ち第2, 第 7方面軍	123. スンバ島、チモール島 145. 硫黄島(玉碎) 147. スンバワ島
第52 "	"	金 沢	ト ラ ッ ク 諸 島	東部軍の ち第31軍	69. ト ラ ッ ク 島 107(甲支隊). " 150. ト ラ ッ ク 島(春島)
第14 "	19. 4. 10	満 州 ハイラル	パラオ諸 島	第2軍の ちパラオ 地区集団	2. ペリリュー島(玉碎) 15. パラオ本島、一部同上(〃) 59. アンガウル島(〃)
第29 "	"	満 州 陽	グアム島	東部軍の ち第31軍	18. グアム島(玉碎) 38. " (〃) 50. テニアン島、一部同上(〃)
第43 "	19. 4. 7	名 古 屋	サイパン 島	第31軍	118. サイパン島(玉碎) 135. " 一部テニアン(〃) 136. " (〃)

(注) 步兵第145連隊は船腹の関係で師団主力から除かれ、じ後硫黄島へ予定した支那派遣軍からの第3、第13師団の南方転用中止に伴い、関東軍から派遣に変更

# 歩兵部隊と特科部隊

平均的な兵士は歩兵部隊に配属された。他の適性によって砲兵、工兵などに振り分けられたが、その兵科は十種類以上におよんだ。

## 歩兵部隊は「軍の主兵」

歩兵は背嚢を背負い、銃剣付きの小銃と手榴弾という武器を身につけて、歩幅七十五センチで歩いて移動した。もつとも、これは歩兵ばかりでは



歩兵部隊の突撃。攻撃前進して陣地を奪うのが歩兵の任務だった。写真は日中戦争で粵漢線（漢口～広東）の奪取をめざして土手の上の鉄路に突撃しているシーン。

なかつた。歩いて移動したのは砲兵も輜重兵も同様だつたからである。銃剣付きの小銃や手榴弾は、どんな兵科の兵隊でも持っていた。それに、歩兵といえども大砲を持っていた。

①武器器 小銃・機関銃・擲弾筒・小口径の大砲で武装した部隊。大砲はせいぜい射程三千メートル級のもののが多かつた。それらは多くは大隊砲とよばれ歩兵大隊ごとに装備していた。

歩兵連隊単位に装備していた大砲もあつたが、これは射程が六千メートル級の山砲（山越えて射撃して、山の向こう側にある敵陣地を攻撃できる大砲）が中心だつた。戦車が登場してくると、それを叩くための速射砲という大砲を装備する歩兵部隊もあつた。これは射程が四千～七千メートルほどあつた。

②攻撃前進 歩兵のもつとも大きな任務は、敵の陣地を目指して攻撃前進し、それを占領することである。小銃にても機関銃にしても敵兵に弾丸を命中させて倒す武器である。機関銃で四キロ、小銃で三キロの射程距離はあつたが、そんなに遠くから射撃することは、まずなかつた。

だから歩兵部隊はあくまでも敵陣地に限りなく接近して、敵兵一人一人を倒して陣地を奪い、占める場合には焼却か地中深く埋めるかして、たいへいの場合連隊長も自決した。

## 特科部隊にはどんなものがあつたか

その場合には焼却か地中深く埋めるかして、たいへいの場合連隊長も自決した。

### 特科部隊にはどんなものがあつたか

歩兵部隊以外の部隊は特科部隊と総称されたり、大砲や戦車のような重量級の兵器を渡河させたりする技術・施設部隊である。

輜重兵が一番分かりにくく、すでに死語である。工兵は橋をかけたり大がかりな陣地を構築したり、大砲や戦車のようないわゆる「荷物」を渡河させたりする技術・施設部隊である。

騎兵と砲兵は常識的に考えてもすぐイメージできることである。補給そのものは兵站部門の貨物廠や兵器廠が担当した。輜重は衣類をもつとも古い特科部隊は、騎兵・砲兵・工兵・輜重兵である。

### 特科部隊にはどんなものがあつたか

その場合には焼却か地中深く埋めるかして、たいへいの場合連隊長も自決した。

歩兵部隊以外の部隊は特科部隊と総称されたり、大砲や戦車のようないわゆる「荷物」を渡河させたりする技術・施設部隊である。

輜重兵が一番分かりにくく、すでに死語である。工兵は橋をかけたり大がかりな陣地を構築したり、大砲や戦車のようないわゆる「荷物」を渡河させたりする技術・施設部隊である。

騎兵と砲兵は常識的に考えてもすぐイメージできることである。補給そのものは兵站部門の貨物廠や兵器廠が担当した。輜重は衣類をもつとも古い特科部隊は、騎兵・砲兵・工兵・輜重兵である。

騎兵と砲兵は常識的に考えてもすぐイメージできることである。補給そのものは兵站部門の貨物廠や兵器廠が担当した。輜重は衣類をもつとも古い特科部隊は、騎兵・砲兵・工兵・輜重兵である。

騎兵と砲兵は常識的に考えてもすぐイメージできることである。補給そのものは兵站部門の貨物廠や兵器廠が担当した。輜重は衣類をもつとも古い特科部隊は、騎兵・砲兵・工兵・輜重兵である。

騎兵部隊の行軍。日中戦争での中国北部。騎兵が背にしている小銃は馬上でも扱いやすいように、歩兵銃より銃身が短かつた。

騎兵の大部隊は一日四十～六十キロ、小部隊なら八十キロ程度機動できただ。歩兵部隊は標準二十分程度とされていた。日の感覚からすれば騎兵の機動性というより歩兵部隊の速度が意外に速い。

領確保することが宿命づけられていた。大砲や迫撃砲が使えない距離になつたら擲弾筒（手榴弾を使用すれば数百メートル）を発射し、小銃も使えないほどに近接したら手榴弾を投げ、陣地に飛び込んだら銃剣で刺し殺して陣地を奪うのが歩兵だった。

砲兵・航空・戦車の部隊も、もちろん敵陣地を攻撃するが、身体ごと陣地に殺到することはなかつた。一人ひとりの敵兵を殺し、味方の兵力で最初に占領するのは歩兵部隊である。「歩兵は軍の主兵」（歩兵操典綱領第十一）だと言われたわけがここにある。

大砲で叩きっぱなし、航空機で爆撃しつぱなしということは、作戦としてはあつたとしても、それがだけでは敵が降伏するということはない。その地に歩兵部隊が進出して初めて敵を降伏させ、占領という目的を達せられたのであつた。

戦車も攻撃前進するが、戦車だけで敵陣地を占領することは、作戦としてはあつたとしても歩兵部隊が随伴しない作戦は考えられなかつた。戦車が開発された初期には歩兵兵器として扱われ、歩兵将校が指揮するものとされていたのもそういう背景があるからだ。

残兵を掃討したり、占領した地域を警備したり、相手の動きを監視したりするのも歩兵であつて、占領地の軍の威力は歩兵部隊によつて維持されていたと言つても過言ではない。その意味からも歩兵は軍の主兵であつた。

### ③郷土部隊

師団のもとに二～四個の歩兵連



騎兵部隊の行軍。日中戦争での中国北部。騎兵が背にしている小銃は馬上でも扱いやすいように、歩兵銃より銃身が短かつた。

騎兵の大部隊は一日四十～六十キロ、小部隊なら八十キロ程度機動できただ。歩兵部隊は標準二十分程度とされていた。日の感覚からすれば騎兵の機動性というより歩兵部隊の速度が意外に速い。

騎兵部隊のもつとも華やかな時期は日露戦争で、あり、それを最初で最後として騎兵の役割は実質的に終えた。

世界的にみても、騎兵は第一次世界大戦が終わった直後から徐々に姿を消していった。師団の騎兵連隊は、自動車と装甲車を装備した搜索連隊と名前を変え、騎兵旅団（騎兵の戦闘部隊。騎兵師団は一度も創設されなかつた）は装甲車隊、のちに戦車隊となつた。最後まで温存された昔ながら

## ○分化していった砲兵

大砲を武器として戦うのが砲兵。大砲とは口径が十二ミリ以上のもので、年とともに口径が大きくなり、射程が伸び、弾道に違いが出てきた。要するに戦術や目的に合わせて幾種類もの大砲が開発された。単に一種類の砲兵部隊だけで操作するには煩雑になつた。そこで砲兵と一括されながらも、さまざま砲兵部隊が生まれた。



迫撃砲に弾を込めている。歩兵部隊の兵器でもあったが、迫撃砲専門の砲兵部隊もあった。

の騎兵旅団は騎兵第四旅団のみだつた。

分化した砲兵部隊は、大砲の種類によつて分化していった。

真っ直ぐ遠くへ飛ばす野砲は野砲兵部隊、山越えて大きな放物線を描くように飛ばす山砲は山砲部隊、口径が一五五ミリ以上・重量八トンを超える重砲は重砲兵部隊（要塞砲兵部隊）、その重砲を戦場に引張つて機動させながら戦闘に参戦する野戦重砲兵部隊というふうである。

師団には野砲兵か山砲兵のどちらかの連隊があつたが普通は野砲兵連隊だつた。

日露戦争の経験から満州のよだな平原地帯での戦闘を第一に考えたからである。支那事変が始まつて山岳地帯に作戦することが多くなり、野砲兵連隊から山砲兵連隊に切り換えた師団が多くなつた。

砲兵部隊にはこのほか、高射砲で飛行機撃墜を目的とする高射砲部隊、騎兵部隊にくつついていた騎砲兵部隊、山砲を小型化したような迫撃砲を扱う迫撃砲部隊などがあつた。迫撃砲の射程は四千メートル前後で、口径も最大で百五十ミリ程度。歩兵部隊とともに行動して敵の陣地が近くにあるのはわかっているが、強固な遮蔽物に覆われて攻撃しにくいというようなときには使用された。弾道は大きく曲射して敵陣地の真上から落下するようになつてゐたからである。

砲兵部隊には必ず観測班というのがついていた。一万メートルを超える地点から、敵の大砲や陣地に命中させるのが仕事だが、精度を高めるため試射をして砲身の向きや角度、込める弾薬量を調整しなければならない。試射の着地点を報告して修

## 正させるのが観測班の仕事である。

その観測班の仕事を専門的にやる部隊があつた。一つは気球兵部隊、もう一つは砲兵情報部隊である。気球兵は文字通り気球に乗つて弾着点を報告する。しかし数は少なく終戦時でも三個中隊ほどしかなかつた。

砲兵情報部隊は味方の射撃効果を上げるために

戦場付近の地形を観測したり、敵砲兵部隊の位置を発射音や煙、発火（夜間）などから確定して味方砲兵部隊に知らせるという任務を持っていた。

## ◎新たな専門部隊を生みつけた工兵部隊

工兵部隊は“なんでも屋”である。あまりにも間口が広いので、時期が満ちて新しい兵科として

次々に独立していった。

すなわち、鐵道兵、通信兵、航空兵、船舶兵（敵前上陸の輸送や沿岸輸送専門）の各兵科部隊がそれである。兵科として独立させるほどではないが、きわめて特殊な技術を扱う分野は、独立工兵部隊（独立工と略称）とさせた。独立とは師団に属しないで、必要に応じてどこにでも配属される部隊という意味である。

たとえば、独立第五連隊は満ソ国境のソ連軍トーチカ陣地を装甲作業機で破壊する部隊、独立第二十七連隊は同じくソ連軍トーチカを有線操縦で操作する小型作業機で破壊する部隊であつた。高圧電流使用機械、作井作油機械、空中写真測量機を持つた独立第十五連隊というのもあつた。では、最後まで師団工兵部隊として残された任務は何だつたのか。

## 陣地構築と渡河、破壊の三つである。

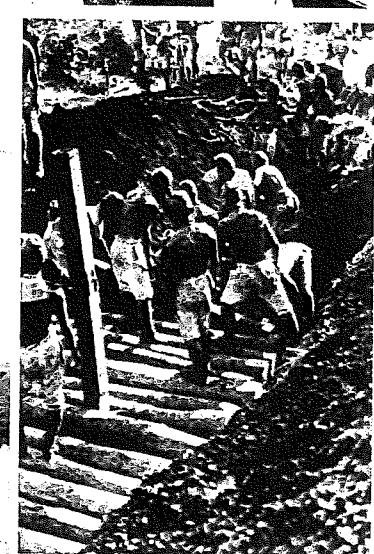
陣地構築と渡河は味方部隊のための建設であり、破壊は敵の陣地・橋・施設を爆破することである。だから工兵の基本は、穴掘り、杭打ち、連結（モノとモノを結び合わせ固定する）であり、漕舟、重量物を数人がかりで運搬すること、そして爆破であった。



工兵から別れて独立した鉄道兵。これは鉄道第1連隊の軽便鉄道の敷設作業。



航空機も最初は工兵が手がけた。写真は昭和16年8月、西安を爆撃する飛行第60戦隊。



師団工兵の陣地構築訓練。

穴掘り（土工と称した）は、たとえば一分間に八、九回スコップで土を掘り、水平に四メートル、垂直に二メートル投げ捨てることができるのが工兵の基本中の基本とされたという。

帝国軍隊の工兵部隊は、ブルドーザーや起重機にはまったく縁がなかつた。

# 憲兵の権限と威力

憲兵は民間に対する警察権も握っていた。有無を言わせぬ粗暴な捜査と、拷問を伴つた自白の強要こそ、暗黒政治の象徴だった。

上領地、植民地でのケンペイの権力  
ケンペイはロウムシャ（労務者）という言葉とともに、太平洋戦争中の占領地域で日本語のまま通用した代表的な言葉とされている。ロウムシャ



広東で日本軍の宣伝ポスターを壁に貼らせる憲兵(右端)。白地に赤で憲兵と書かれた腕章を巻き、上等兵でも長靴と軍刀と拳銃が許された。

は、人狩り同然に住民を引っ立てて、道路・鉄道・陣地等の工事に使役したから、恐れられたのである。いずれも日本軍の粗暴・威圧・弾圧を象徴する言葉であり、まことに不名誉で恥ずべき歴史である。

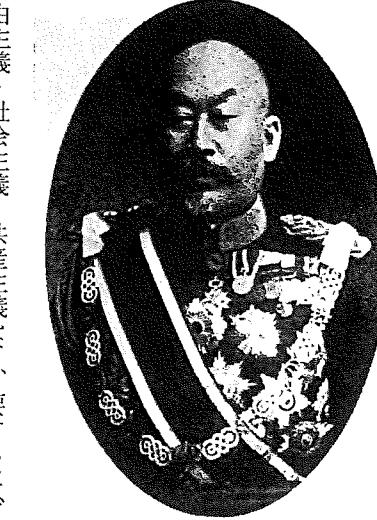
ケンペイは通敵行為・破壊行為の疑いありと睨んだ人物を拷問にかけ、自白を強要し、冤罪の山を築いた。中国でも韓国でも台湾でもビルマでもフィリピンでも、戦後の政治指導者となつた人物のうち憲兵の拷問にあつた者はいくらでもいる。

占領地の住民は後難を恐れて、女を差し出し、食物を差し出し、時には財宝を差し出した。そこに付け込んで、すすんでそれらを強要した憲兵が多かった。彼らは威嚇憲兵と自らも呼んだそうだが、占領地や植民地では八、九割がその類の憲兵だつたといわれる。

戦後のBC級戦犯で絞首刑なり銃殺刑となつたものは約一千名いるが、そのうち約三百名は憲兵だつた。

戦後BC級戦犯で絞首刑なり銃殺刑となつたものは約一千名いるが、そのうち約三百名は憲兵だつた。

戦後BC級戦犯で絞首刑なり銃殺刑となつたものは約一千名いるが、そのうち約三百名は憲兵だつた。



明治43年、併合直後の朝鮮に、武断政治のもと憲兵政治で徹底弾圧を強行した二人。上が朝鮮総督寺内正毅大将、下が韓國駐劄憲兵隊長明石元二郎少将。当時の階級のもの。



明治43年、併合直後の朝鮮に、武断政治のもと憲兵政治で徹底弾圧を強行した二人。上が朝鮮総督寺内正毅大将、下が韓國駐劄憲兵隊長明石元二郎少将。当時の階級のもの。

自由主義・社会主義・共産主義など、要するに少しでも天皇の絶対的権威に疑問を抱く考え方、あるいは軍の在り方に批判的であつたり、戦争に疑問を抱く考え方を表明すればもちろんのこと（新聞・雑誌やラジオや議会・演説会という公の場所でなくとも、知人や隣人に密かに話したという場合でも）、そういう類の書物・新聞などを所有しているだけで、拘束し、拷問した。「国内の安寧」「軍機保護」という大きな網の中で、いかようにも処理できるオールマイティを与えていたのが憲兵だった。

## 皇道派憲兵と東条憲兵

元憲兵の大谷敬二郎は著書『憲兵』で、「憲兵の軌道をはずし、世の指弾をうけた」ものとして「皇道派憲兵」と「東条憲兵」をあげている。

皇道派憲兵というのは、斎藤実内閣で陸軍大臣となつた荒木貞夫大将と憲兵司令官秦真次中将の

コンビでなされた派閥に偏った弾圧をさしている。東条憲兵とは、東条英機首相が反対派を徹底的に憲兵の威圧のもとにさらし、懲罰召集を始めとする人事にも積極的に活用したことなどをいう。その実情は東条自身が戦後、「憲兵を使いすぎた」ともらすほど徹底したものであつた。

皇道派憲兵の一般的な実態については、『原田日記』（元老・西園寺公望の秘書をつとめた原田熊雄の日記）昭和八年一月十六日の、閣議における

「高橋（是清）蔵相、荒木陸相を罵倒」が、その

実情を生きしく伝えている。

「……事部に不利なことをいえば、すぐに憲兵が

きて剣をガチャガチャやつたり、ピストルを向けたりして威嚇される。言論の圧迫今日より酷いこ

とはない。現に九州のある新聞社が、軍部に不利なことを書いたというので、飛行機で爆弾を落とすといつて、新聞社の上空を旋回して威嚇したと

いう事実がある。のみならず、スペイ政治のよう

た。憲兵司令官は統監府の警務長官を兼任し、地方の憲兵隊長は警察部長を兼ねた。朝鮮警察は憲兵の指揮下におかれ、憲兵政治が行われた。初期の武断政治の最高指揮官が明石元二郎少将であり、憲兵政治の最高指揮官が寺内正毅大将であり、カイライ国家「満州国」における日本軍憲兵は軍や警察官とともに、「臨陣格殺」（反日分子はその場で殺害できる）という権限を与えられ、やりたい放題の猛威を振るつた。

たとえば瓦房店守備隊と共に謀した當口憲兵隊は、列車運行妨害事件という「抗日行為」を手がかりとして、瓦房店街のすべての中国人商店を閉鎖させ、店主・店員のすべてを拘留・拷問し、中国人商店の家宅捜索・帳簿の押収を実施した（いわゆる瓦房店事件。昭和九年）。憲兵隊が命令し、威嚇したという文言、「営業を中止し、店主店員共全員守備隊に出頭すべし。若し出頭せざるに於いては家屋全部を焼払ふべし」とか、「現在は戦時時代なり。汝等の如き者を銃殺するは容易にして問題なし」なども記録に残っている（江口圭一『昭和の歴史・第4巻・十五年戦争の開幕』三三九頁）。当時やその後の戦地における憲兵の捜査のやり方、どのようなものであつたか想像に難くなかった。

憲兵は「陸海軍の警察官」であるが、「国民の警察官」でもあつた（憲兵令第一条「憲兵ハ陸軍大臣ノ管轄ニ属シ、主トシテ軍事警察ヲ掌り、兼テ行政・司法警察ヲ掌ル」）。とくに昭和三年に思想係、いわゆる特高が設置されてからは、反軍・反戦・

に、憲兵が政治家を尾行したり、甚だ怪しからぬ状態である。現に自分のところに来る新聞記者も、私たちも言いたいことがいえない、といつて歎いていた、といったところ、陸相は色をなして、「そんなことはありません」というから、「ないことはない、まあ君の精神は認めるが、実行が伴わないじやないか。君の監督下にある憲兵が、かくのごとき状態でどうするか」といつたところ、何とかいろいろいつていていたが、閣僚の中でだれ一人言葉をもつて自分を支持するものはいなかつた。いつのころからか、憲兵隊は議会開会中は十名内外の特務憲兵を詰めさせ、議員の発言をチエックする慣習が出来上がっていった。「衆議院と貴族院の渡り廊下に近く、衆議院事務局の一室」が憲兵の詰所であったという。議員の発言をチェックしていただけではない。開会前から、政党や問題になりそうな議員の情報を収集し、彼らが軍に对する攻撃材料として何を握っているかを正確に報告し、それに対する答弁資料を揃えることが、憲兵には義務づけられていたのだ。

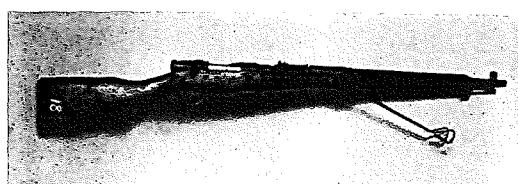
東条憲兵の典型的の一つとされているのが衆議院議員・中野正剛を自決に追いこんだ弾圧がある。中野は日比谷公会堂で「天下一人を以て興る」と題して演説し、さらに朝日新聞で「戦時宰相論」を書き、痛烈に東条内閣を非難した。昭和七年暮れから翌年一月にかけてのことである。さらに重臣に働きかけて東条内閣打倒の工作を進めようとしていた。

怒り心頭に発した東条首相は、まず警視庁に拘

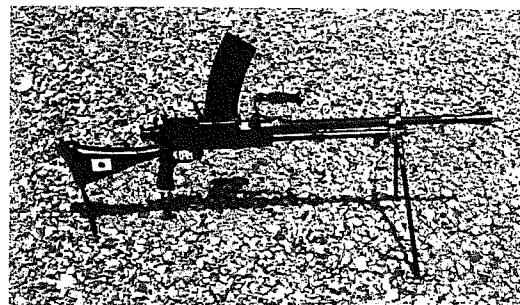
# 兵隊は兵器と苦楽とともに



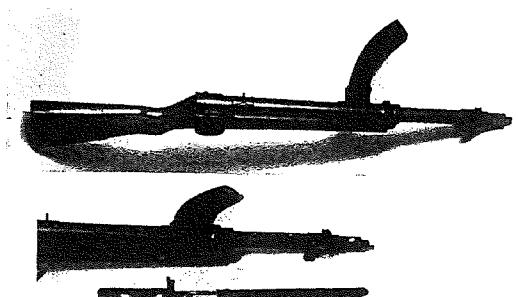
サンパチ式歩兵銃。命中率は優秀だった。



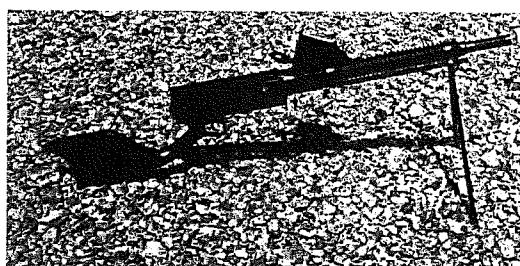
99式歩兵銃。38式より軽量。昭和16年生産開始。



99式軽機関銃。1個分隊12名に1挺つけられた。



100式機関短銃（発展型）。下が装着用の銃剣。



11年式軽機関銃。陸軍初の国産機関銃。



92式7.7ミリ重機関銃。1分間に200発射撃。1個中隊に3、4挺つけられた。



「皇道派憲兵」を強行した二人。右が憲兵を管轄した陸軍大臣荒木貞夫大將、左が荒木に見込まれて昭和7年2月、憲兵司令官になった秦真次中将。秦はいわゆる青年将校（皇道派）をおだて、時には庇護して、軍の派閥抗争の片棒を担いだといわれている。

ガダルカナルから撤退することを決した御前會議は昭和十七年の大晦日である。それに関連して政治家ならではの情報を耳にして、知人にヒソヒソ話で語ったことが、憲兵出動のタネに出来たのである。知人一人というのも、憲兵に脅しすかされて、密告同然のことをしゃべるところまで追い込まれるのであろう。国民の内緒話も封じようとしたのが憲兵であり、「東条憲兵」はその最たるものであった。

## 優秀な兵を充てたというが……

支那事変の最中に、現役兵として北京郊外にあつた、岩手県出身のA上等兵（小学校卒）は、衛兵司令で立哨中に隊長を訪ねてきた憲兵伍長の横柄な態度を目撃して驚愕し、さらには憲兵の月給が百円以上であるということを知るや、勢い込んで憲兵学校へ志願した（森山康平・栗崎ゆたか『証言記録 大東亜共栄圏』一四〇頁）。

陸軍憲兵学校はもともと憲兵科将校、憲兵科下士官のみを養成していたが、昭和十二年一月からは憲兵上等兵候補者を全国から募集して教育した。憲兵の最下級は上等兵となっていたのである。同年七月支那事変の勃発で、憲兵の需要が急増し、兵士からの憲兵教育に拍車がかかった。

そこでは憲法、行政法、警察法、陸海軍刑法、刑事訴訟法、陸海軍軍法会議法、民法、國際公法、社会学、法医学、外国语のほか剣道、柔道、捕縄術、馬術、教練、さらには特高警察、外事警察、司法警察など、法律専門家と検査官を兼ね備えた同期生二百名のうちA上等兵のように小学校卒は一割、とても卒業試験には合格できまいと観念していたところ、採用となつた。小躍りして郷里に「月給百円」の身分になつたことを知らせたそだ。その村の小学校長でも百円はもらつていなかつた。中隊長はそのとき、「Aよ、人間の頭といふものはそう差はないんだよ。努力、努力、努力が成功につながるのだ。自信を持つて世の中を渡れ。一生勉強せよ。よくやつた」とほめてくれたそうだ。

それだけに兵隊から憲兵になつた者はどうあらゆる意味で誇り高く、自信に溢れていたわけだ。職務に忠実でないはずがない。兵隊あがりの憲兵は住民と直接対峙する最前線に立たされた。大多数の住民にとってこれほど迷惑な話はない。

昭和二十年三月、一県に一憲兵隊となつた。即席教育の憲兵が多数配置され、その兵力は一万名を超えた。終戦時、外地も含めたその総兵力は三万六千名、うち将校は千八百名で、大部分は上等兵を含む下士官兵であった。

知識と実技を徹底的に詰め込んだ。

憲兵上等兵候補者は学歴は一切問わなかつたら、小学校卒の学生にはとりわけ厳しい閑門だつたといわれる。前記A上等兵は、「憲兵学校は鬼みたいな学校だつた。地獄だつた。泣きだす者もいた。そんな者に対しては、（原隊に）帰りたい者は帰れ、八円八十銭の兵隊を百円以上で雇うんだ。嫌な者は帰れというふうだつた」（前掲書）と語っている。

# 将校と下士官の養成

部隊を動かすのが将校であり、実際の戦闘で兵隊の先頭にたつて働くのが下士官である。彼らはどんな教育を受けたのか。

## 現役将校を養成・陸軍士官学校

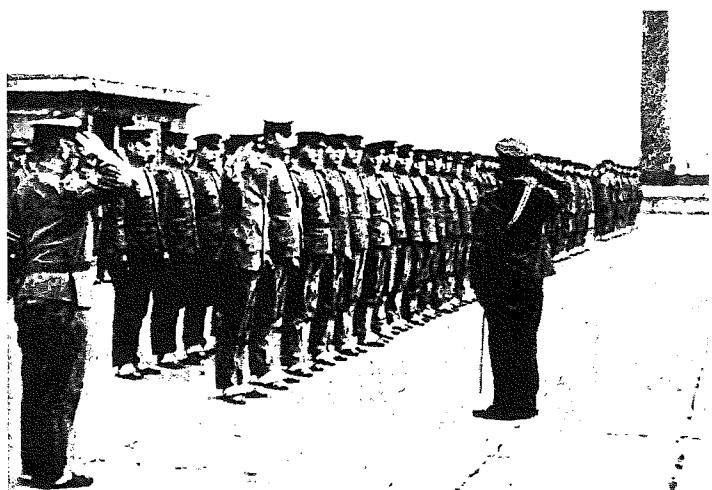
指揮官となる将校を養成するのが、陸軍士官学校（士官学校とか陸士と略称した）だつた。海軍将校を養成する海軍兵学校（海兵、兵学校など略称

した）と並んで、一高等ナンバー校と同様に中学生の憧れの学校だつた。身体頑健、視力優秀関だつたともいえる。毎年十倍以上の受験者が集まつた。

明治八年に開校。十年から二十二年までの卒業



陸軍士官学校予科（のち予科士官学校）は16歳から入学できた。



朝の点呼（日朝点呼）。生徒たちが指揮官に頭を右に向けて敬礼している。

者千二百八十五人は士官生徒と呼ばれた。この時代が十一期ある。十三年と十七年は卒業者がなかつた。さらに士官候補生と呼称されるようになつた明治二十三年卒の第一期から昭和二十年卒の第五十八期まで三万七千四百六十一人いる。

昭和の十年代は毎年三百人以上の卒業生を送り出したが、十二年以降から百人ぐらいたつ増えている。十五年には一挙に一千七百人（前年の約三倍）も卒業させた。十五年の卒業生は十二年入校だが、最初の入学試験が終わつたあと日中戦争が始まつて、もう一回選抜したのである。

十六年から二十年までの卒業生は毎年二千二、三百人前後だつた。昭和二十年六月、第五十八期

生が卒業したとき、第五十九期生二千八百五十人、第六十期生四千七百人、昭和二十年入校で第六十一期生五千人が在籍していた。

陸士の入学資格は大きく三つに分かれていた。一つは十六歳から十九歳まで。実力さえあれば歴は問わないが、普通は中学校を卒業した者が受験した。

二つ目はすでに軍人となつてゐる者で、二十四歳までの現役下士官、二十五歳までの幹部候補生、操縦候補生、現役兵である。幹部候補生は、要するに兵隊として入営した者を試験を受けさせて将来は将校まで昇進させようとしていた者である。操縦候補生といふのは各種の飛行学校を出て飛行機の操縦を習得した者をいう。

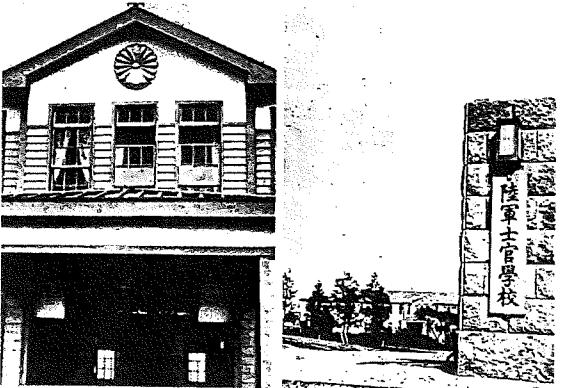
現役兵にも陸士入学の門戸を開いていたところがおもしろいが、実際に何人かが受験して将校になつてゐる。

三つ目は無試験組で、陸軍幼年学校本科を卒業した者が進んだが、その本科を陸軍士官学校予科として併合した。さらに昭和十二年八月には、予科を陸軍予科士官学校として独立させた。それまでは予科も本科も東京・市ヶ谷（台地になつてるので市ヶ谷台と呼ばれた）にあつたが、予科が独立するにともなつて、本科は神奈川県座間に移つた。これが相武台である。

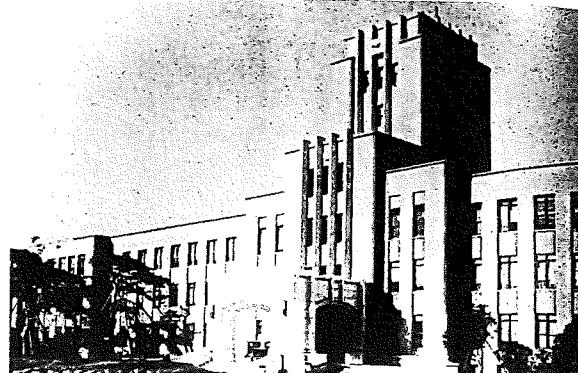
一方、太平洋戦争が始まると大量の生徒を入學させ手狭になつたことや、市ヶ谷に大本營が設置されたので、予科士官学校は埼玉県朝霞に移転した。これが振武台である。

昭和十二年からは航空士官学校ができた。陸士予科（あるいは予科士官学校）を卒業して航空兵科を選んだ者が入校した。最初は埼玉県の所沢陸軍飛行学校跡に造られたが、のちに近くの豊岡に移つた。これが修武台である。修武台の卒業生は四千四百七十六人、終戦のとき四千四百八十人の士官候補生が在校していた。

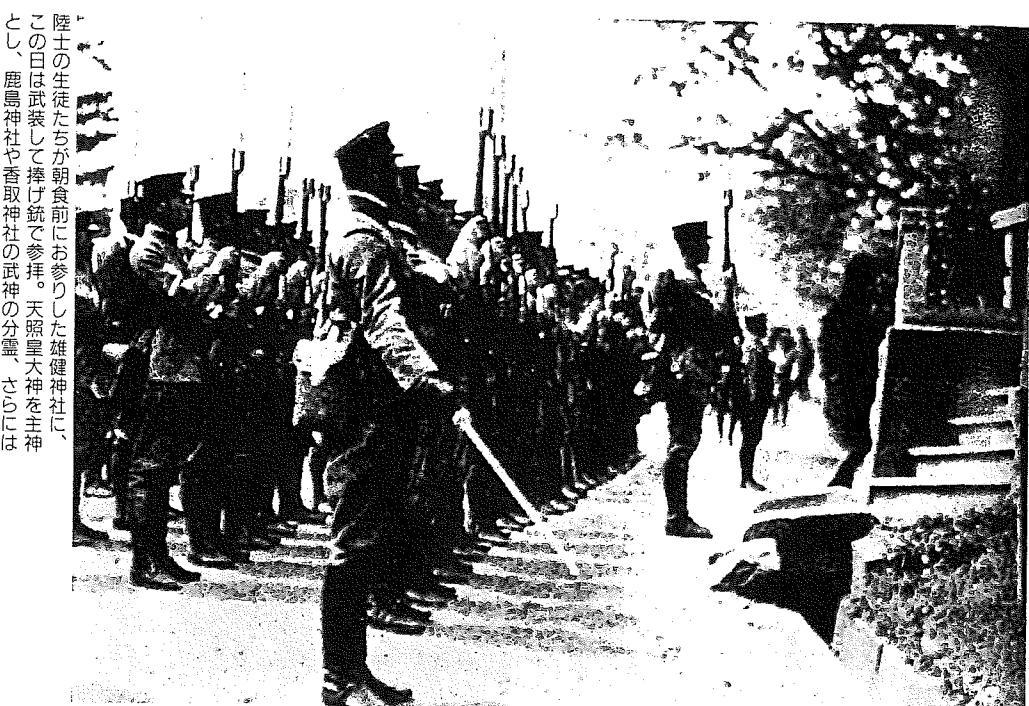
相武台、振武台、修武台の名はいずれも天皇、つまり大元帥陛下が下賜したものという。



神奈川県座間の相武台。左は本部玄関。



昭和12年まで陸士本科があつた市ヶ谷台の本部。太平洋戦争中は大本營、敗戦後は東京裁判法廷。



陸士の生徒たちが朝食前にお参りした雄健神社に、この日は武装して捧げ銃で参拝。天照大神を主神とし、鹿島神社や香取神社の男神の分靈、さらには靖国神社から陸士卒の戦没者を分靈として祀る。

一方、太平洋戦争が始まると大量の生徒を入學させ手狭になつたことや、市ヶ谷に大本營が設置されたので、予科士官学校は埼玉県の所沢陸軍飛行学校跡に造られたが、のちに近くの豊岡に移つた。これが修武台である。修武台の卒業生は四千四百七十六人、終戦のとき四千四百八十人の士官候補生が在校していた。

相武台、振武台、修武台の名はいずれも天皇、つまり大元帥陛下が下賜したものという。

## 予科を卒業して伍長、部隊に配属

陸士予科（予科士官学校）は一年間で、普通教科は高校並み（旧制）だが、組織はもちろん軍隊並みである。

合宿制であるし、区隊に分けられ、いくつかの

区隊が集まって中隊が編成され、中隊を合わせたものを生徒隊と呼んだ。区隊長も中隊長も現役の将校であり、学校長は中将がつとめた。

午前中は語学（英・独・仏・露・支〔中国語〕）のうち一ヵ国語）を含めた普通学。午後はいわゆる区隊長が指揮する軍事教練だが、訓育と呼ばれた。夕方四時になるとそれも終わり、一時間の運動時間が宮城と故郷に向かって遙拝するのも一つの慣習だつた。

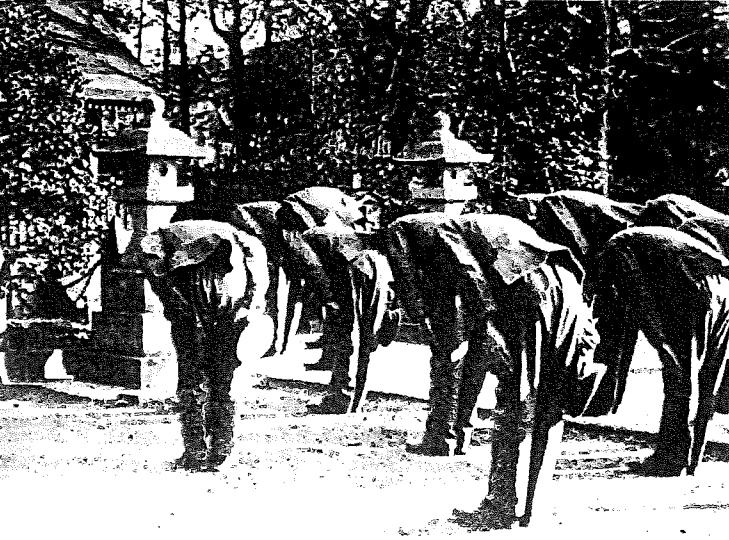
七時から九時まで一斉に自習時間。九時に点呼を受け、軍人勅諭を朗誦して九時半就寝。六時夕食。夕食後、校庭に出て号令かけの練習をやつた。付近の住民はこの練習を市ヶ谷台名物と称していたそつだ。

七時から九時まで一斉に自習時間。九時に点呼

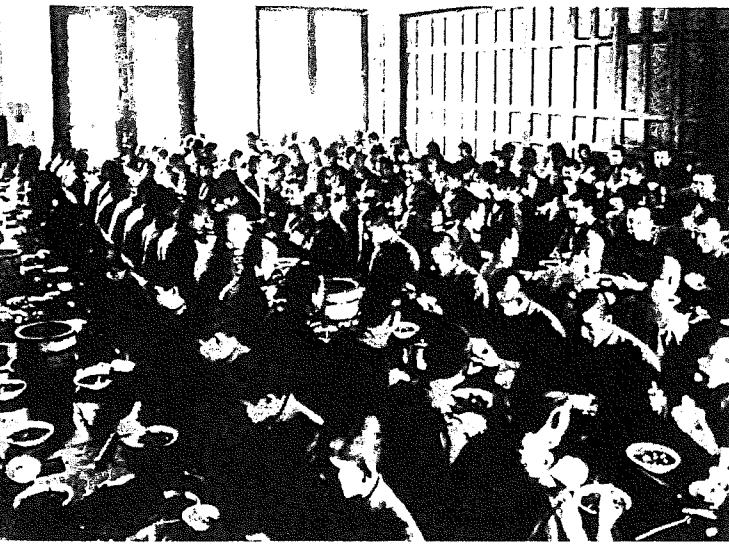
間。何をやってもよかつた。

六時夕食。夕食後、校庭に出て号令かけの練習をやつた。付近の住民はこの練習を市ヶ谷台名物と称していたそつだ。

82



朝食前の雄健神社への参拝は個人で。



兵舎の兵隊たちの食事と異なり、おひつやヤカンが卓上に置かれ、自分でよそつた。おかげも豊富なようだ。



る。補給や輸送担当の輜重兵科を最初から希望する者はほとんどいなかつたそつだ。兵科ごとに分けられると兵科別の訓練も加わり、卒業前になると任地志願があつた。卒業式には皇族が出席するのが慣例だつた。

予科を卒業するといつたん部隊に配属して実地教育した。これを隊付と呼んだ。最初に隊付となつたその部隊を彼らは原隊と呼んだ。本科に進む前の予備教育である。ここで初めて士官候補生を

命じられ、階級も上等兵（兵の最上級）<sup>（注）</sup>間もなく伍長（下士官）に進級する。いよいよ将校への道をたどる第一歩である。

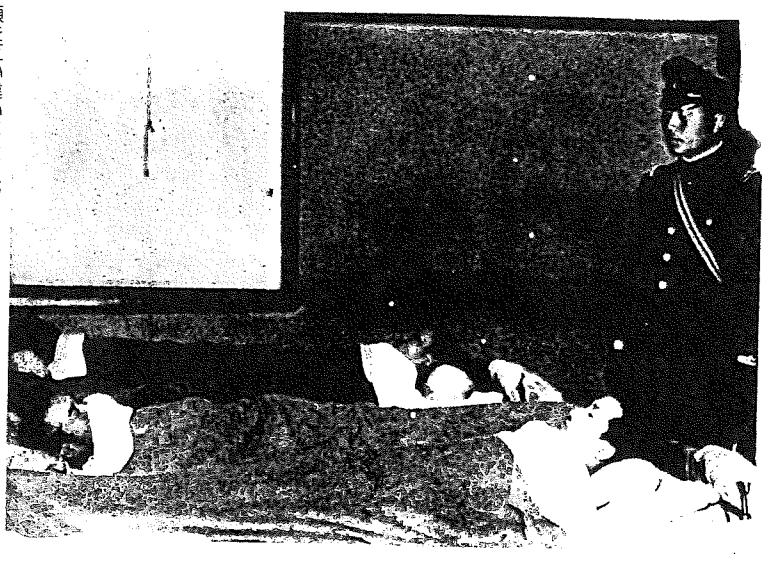
もつとも、隊付になつたとはいえ、実際の軍隊の雰囲気になじませるという程度のもので、部隊の将校集会所などに出入りして、もつぱら先輩将校のお説を拝聴するという役割であつた。実際にその部隊が戦闘で出動する場合でも、一緒に戦場までかけるということはまずなかつた。



授業中は机の上に名札を置いた。

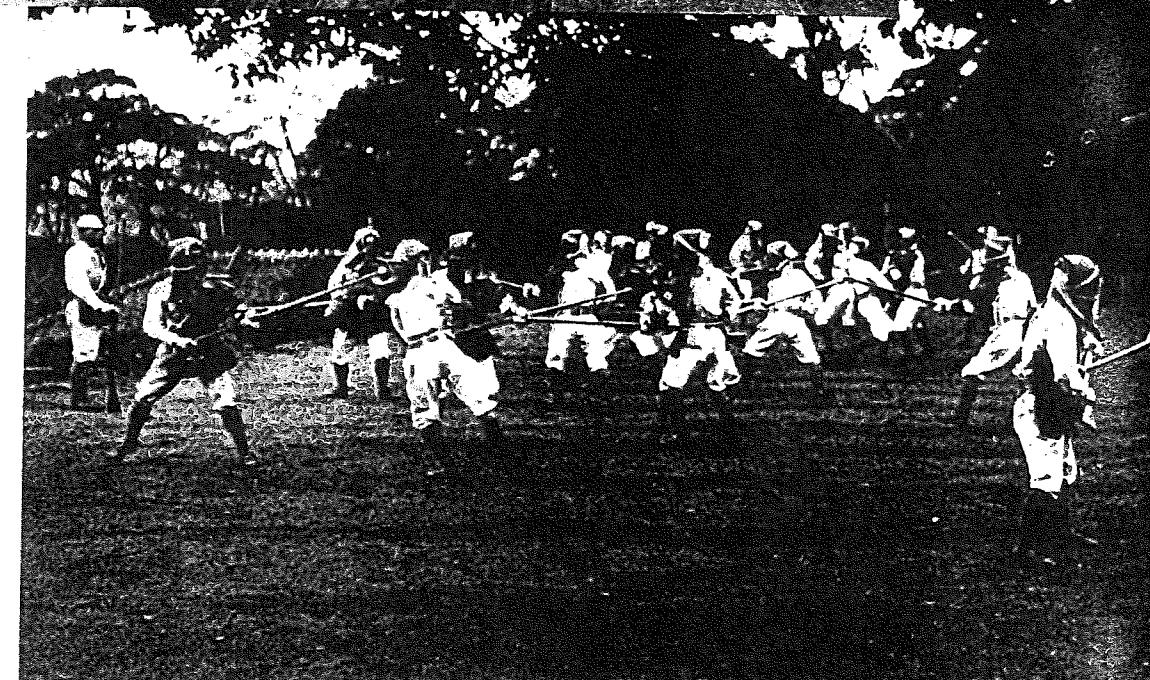


自習時間は毎日2時間しかない。集中力が成績に現れた。



予科では午前中が高校（旧制）程度の普通の授業だった。

頭を互い違いにして就寝したのは何か理由があったのか。



柔道と撃剣は日本軍人のお家芸。白兵戦を最後の手段とした日本軍だから、これは戦闘に直結した訓練だった。



瞬発力、決断力、胆力を養うさまざまな工夫がつた。跳び箱は普通だが、左のように高い所から飛び下りさせる単純な動作が生徒たちを鍛えた。

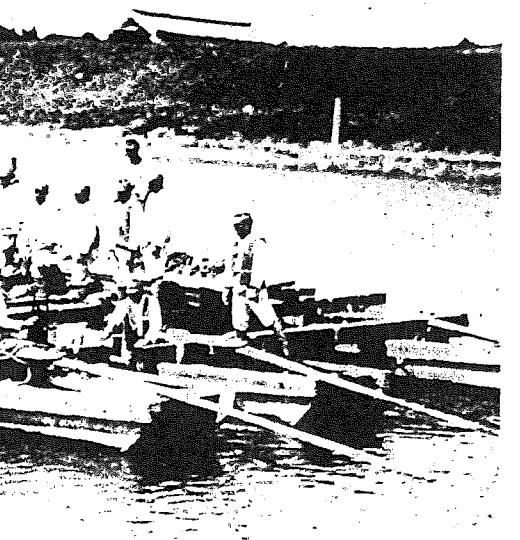
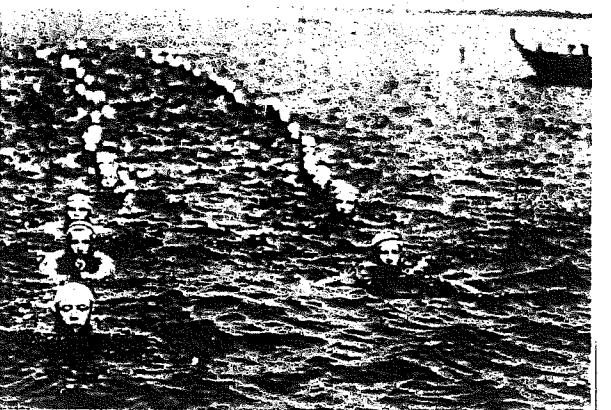


筋肉を鍛え、敏捷性を育てる鉄棒。



身を屈めて勢いよく天を突き上げる。東京の冬の寒さなら20回も続ければ体が温まった。





夏の錬習は遠泳、飛び込み、浜辺の相撲。陸軍将校といえどもボートぐらいは操れないと臨機応変の指揮はこれない。

### 陸士本科を出ると見習士官

隊付は五ヵ月（短縮されても二ヵ月）。終わると軍曹に進み、本科（陸軍士官学校）に改めて入った。これが一年十ヵ月、昭和十四、五年からは一年半程度に短縮された。

授業の三割以上が戦術・戦史・軍制に当たられ、その他の軍事学としては兵器、射撃、航空、築城、馬学、軍事衛生、外国语であった。

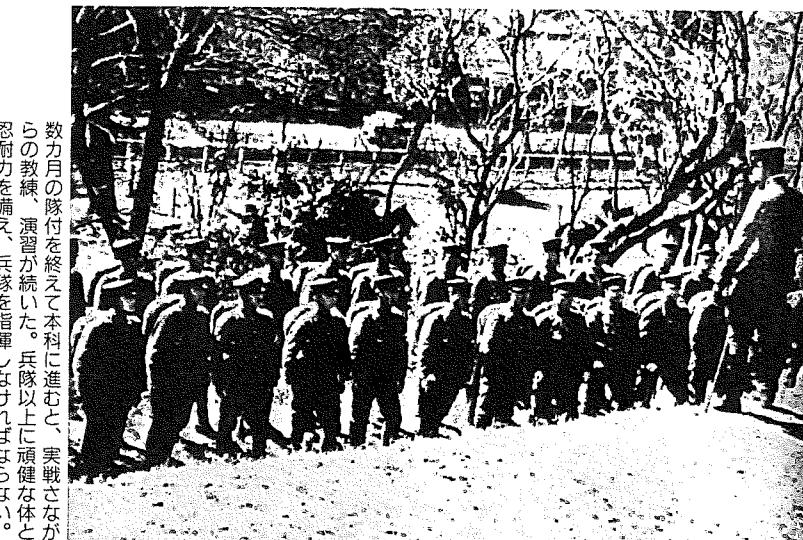
しかし、さすがにその中心となるのは指揮官としての養成にあり、前期・中期・後期に分けて、小部隊から次第に大きな部隊の指揮をどうするのか、実地に則した訓練が行われた。

どんな教育が行われていたのだろうか。昭和十五年に卒業した 森松俊夫氏の述べているところをみてみよう。

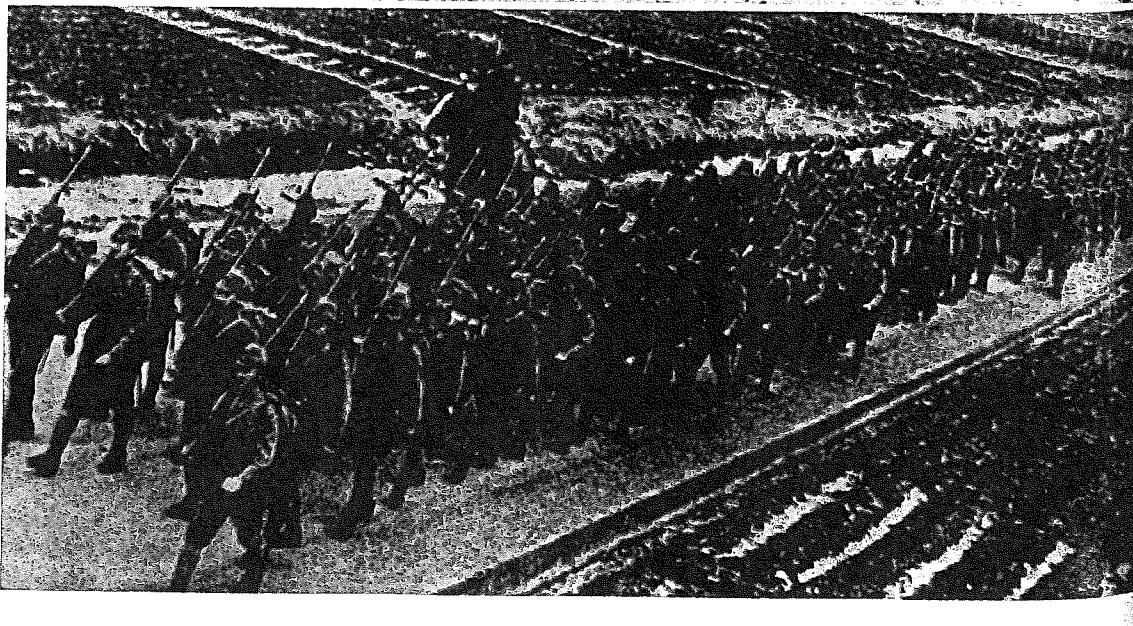
「教練が前期から中期・後期へ、分隊、小隊、中隊訓練へと進む。指揮官と兵は、生徒がお互いを交代して部隊を編成する。教育の進度に応じて、富士裾野や豊橋の高師ヶ原、天伯原で野営演習や実弾射撃を実施した。猛烈な鍛錬で、すさまじいものであった。生徒はまだ二十歳にならぬ者が大部分であったが、しだいに精神的にも肉体的にもたくましくなり、少々のことではへこたれぬ根性ができてきた。

とくに指揮官は、部下を戦場で戦死させないよう、無駄死をしたり、訓練中に事故を起こさせぬよう、相武台が地獄と思えるほど鍛え抜いておかねばならぬというのが、生徒隊長の訓練方針であ

つた。

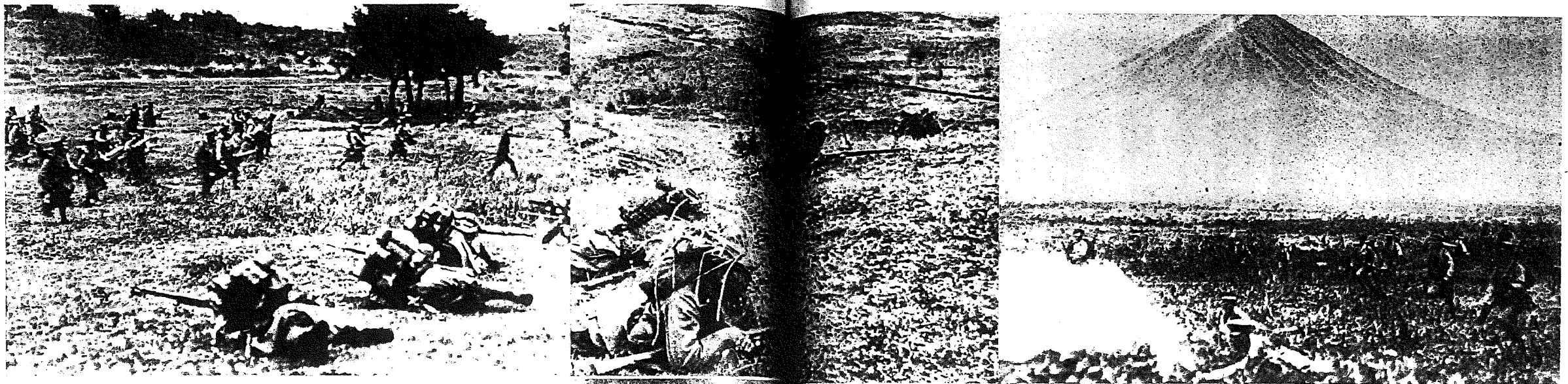


数ヵ月の隊付を終えて本科に進むと、実戦ながらの教練、演習が続いた。兵隊以上に頑健な体と忍耐力を備え、兵隊を指揮しなければならない。



また、指揮官が居なくなつた部隊が、いかに哀れなものであるかを教え、指揮官の早死を戒めて、演習では叩かれ、叱られ、蹴飛ばされながら、鍛錬を重ねた。

しかし、指揮官は死ぬ公算が多い職であるから、



富士の裾野の演習場では、兵隊と指揮官にお互いが分かれて鍛えた。元気がいいだけでは指揮官はつとまらない。情況を把握する能力と、攻撃か待機か、指揮官の決断力が部隊の運命を左右する。



**下士官養成の陸軍教導学校**

下士官を養成するため、昭和二年六月、陸軍教導学校が仙台と豊橋に設けられ、現役兵から上等兵に上がった者が下士官候補生として入学した。約一年間のあと伍長として原隊に戻ってきた。

下士官というのは、長く兵隊のままでそれなりに働きが認められれば兵長となり伍長となる場合が多くたが、教導学校で正式の下士官教育を受けた者もいたのである。

教導学校は昭和十三年、陸軍予備士官学校となり甲種幹部候補生を予備将校とする学校になつたので、従来の現役下士官候補者の教育は、各部隊のなかで教育した。昭和十八年からは、軍教育隊という組織を、東部・中部・西部・朝鮮・台湾の各軍管区につくり、そこに収容して教育した。教導学校出身の下士官は兵隊上がりの下士官からも一目置かれる存在だった。

こうして鍛えられた将校の卵は、卒業するとほとんどが原隊に配属され、見習士官と称された。数カ月後、少尉に任官し、本物の将校が誕生する。少尉任官の場合には、部隊将兵全員が整列するなか、命課布達式が行われた。部隊長が抜刀して朗々とたとえば次のように宣告した。

「天皇陛下の命により陸軍歩兵少尉○○○○何職に補せらる。よつて、同官に服従し、各々軍規を守り職務に勉励し、その命令を遵法すべし」

兵隊たちもはじめて新しい将校が自分たちの指揮官の一人に加わったことを知るのだった。

### 幹部候補生から将校への道

将校の養成には、このほか大きなコースとして幹部候補生があつた。兵隊として入営した者のなかから、学歴の高い者を選抜して特別に教育して甲と乙に分けた。甲種幹部候補生（甲幹と略称した）が予備役の将校となつた。予備役とは、陸士卒業者がそのまま軍にとどまるのに対して、必要に応じて召集される。

昭和十三年から十八年にかけて、陸軍予備士官学校を仙台、奉天（満州）、豊橋（二校）、前橋、久留米（二校）、熊本に順次開校して、甲種幹部候補生を入学させ、一年一ヶ月で予備少尉に任官させた。日中戦争から太平洋戦争へと続いた時期だから、予備とはいえ任官と同時に召集するのがねらいだつた。

乙種幹部候補生（乙幹と略称）は予備役下士官であつて、兵役が終わるころまでにすべて軍曹に昇進させた。

生徒たちは『死生觀』について、考え方、悟りを開き、また迷い、先輩の記録を読んでさらに考えるるのである。私は、旺盛な責任観念をもつて自分の任務達成に最大の努力を傾注する。任務が完遂できなくて、途中で挫折しても、自分としては任務に殉じたのだ、自己の責任に生命を捧げたのだ、だと、満足して死ぬると信じていた。どうせ短い人生だ、太く短く生きようと覚悟を定め、不安は感じなかつた』（『図説 帝国陸軍』所収「陸軍の諸学校」）

# さまざまな学校

どの部隊も均質な戦力を保持するには、新兵器の取り扱いや新戦術の教育を日常的に行う必要があった。

## 補充学校とは

陸軍は、海軍と同様に、さまざまな学校を設けて必要な教育を実施していた。軍隊というものは別

て必要な教育を実施していた。軍隊というものは別



陸軍工科学校（陸軍兵器学校）。機関銃の射撃訓練で精度の向上をはかった。

の面からみると巨大な教育組織でもあった。兵隊でも下士官という階級に昇ると、そういう学校で新しい軍事知識を習得する機会があった。

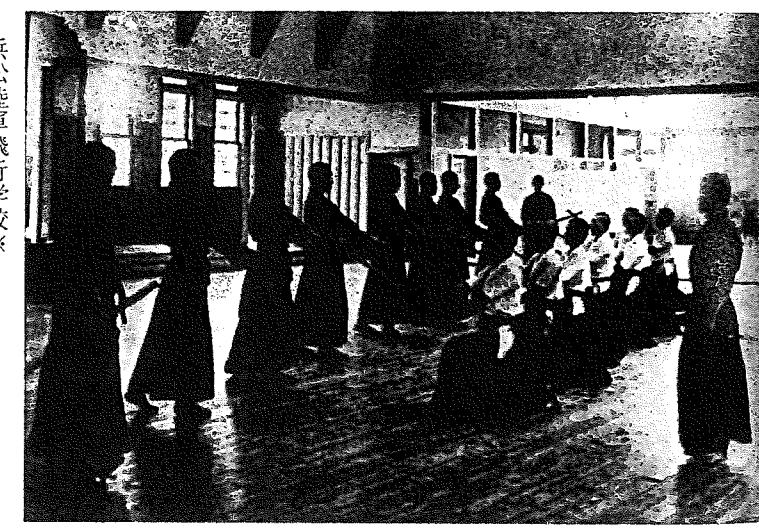
陸軍の学校は大きく分けると三つの性格に分けられるもあつたが、大部分は下士官にも入学資格が与えられていたのである。

陸軍の学校は大きく分けると三つの性格に分けられた。昭和十二、三年を基準にしてざつと紹介してみよう。

### 第一は補充学校である。

これは新しい人員を養成して補充するという意味で、すでに述べた陸軍幼年学校、陸軍士官学校（陸軍予科士官学校、陸軍士官学校、陸軍航空士官学校）、陸軍予備士官学校、陸軍教導学校などは補充学校である。これらの学校のなかで兵隊経験はもちろんその他の軍隊経験がまったくない者が入学するのが幼年学校と士官学校（や予科士官学校）だった。士官学校は少数だが軍隊経験者も入学したが、大部分は中学校の新卒者で占められていたのである。

また、参謀を育てる陸軍大学校をはじめ、陸軍憲兵学校、陸軍砲工学校（のち陸軍科学学校）、陸軍工科学校（のち陸軍兵器学校）なども補充学校



陸軍戸山学校で剣術の稽古。

## 実施学校とは

第二が実施学校と呼ばれるグループで、全部で十七校あつた。

これは兵科別の学校でそれぞれの専門の将校や下士官を随時入校させて、新兵器の使用法や新しい戦術などを短期間で教育しては部隊に戻した。新しい兵器の取り扱いや新戦術などを普及する目的の学校である。

次は昭和十二、三年ごろの実施学校一覧で、だいたい学校名でどんな兵科に関係するものかわかるものが多い。次に列記してみよう。（※は尉官以上が入校）

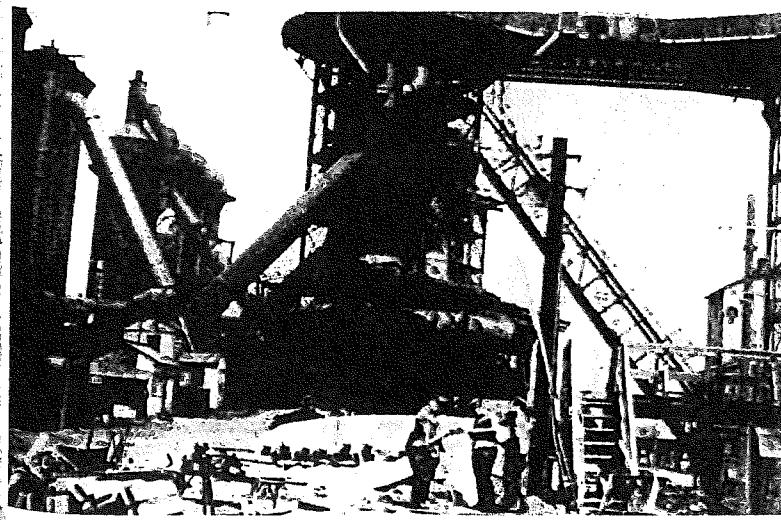
- ・陸軍歩兵学校※
- ・陸軍騎兵学校※
- ・陸軍戦車学校（のちの千葉陸軍戦車学校）
- ・陸軍野戦砲学校
- ・陸軍重砲兵学校
- ・陸軍防空学校（のちの千葉陸軍高射学校）
- ・浜松陸軍飛行学校※
- ・陸軍通信学校
- ・陸軍自動車学校（のち、陸軍輜重兵学校が分立）
- ・陸軍戸山学校
- ・陸軍工兵学校
- ・下志津陸軍飛行学校
- ・明野陸軍飛行学校
- ・熊谷陸軍飛行学校

太平洋戦争が始まると、十四、五歳の少年を募集した補充学校が生まれた。いずれも特殊な技術を要する下士官の養成を目的とし、陸軍少年戦車兵学校（昭和十六年十一月）、陸軍少年通信兵学校、陸軍少年飛行学校（昭和十八年三月）などがそれである。

太平洋戦争が始まるとき、十四、五歳の少年を募集中した補充学校が生まれた。いずれも特殊な技術を要する下士官の養成を目的とし、陸軍少年戦車兵学校（昭和十六年十一月）、陸軍少年通信兵学校、陸軍少年飛行学校（昭和十八年三月）などがそれである。

太平洋戦争が始まるとき、十四、五歳の少年を募集中した補充学校が生まれた。いずれも特殊な技術を要する下士官の養成を目的とし、陸軍少年戦車兵学校（昭和十六年十一月）、陸軍少年通信兵学校、陸軍少年飛行学校（昭和十八年三月）などがそれである。

太平洋戦争が始まるとき、十四、五歳の少年を募集中した補充学校が生まれた。いずれも特殊な技術を要する下士官の養成を目的とし、陸軍少年戦車兵学校（昭和十六年十一月）、陸軍少年通信兵学校、陸軍少年飛行学校（昭和十八年三月）などがそれである。



陸軍砲工学校（陸軍科学学校）。室蘭鉄鋼所で大砲のためか、鋼の実験を依頼していた。

## バラエティに富む飛行学校

るわけにいかなかつたわけである。後述（九四頁）の中野学校とよく似ている。

## バラエティに富む飛行学校

飛行学校だけが五つもあつた。これはそれぞれ教育する内容が異なつていていたからである。太平洋戦争は完全な航空主兵の戦いだったが、陸軍の飛行機は洋上飛行が苦手で、陸伝い航法を主力とした。

◎所沢陸軍飛行学校は最古の飛行学校

大正八年の開設で当時は陸軍航空学校と称し、

唯一の飛行学校としてパイロットも機関や整備の要員も養成していた。航空機の発達に伴い、まずパイロット関係では大正十三年に下志津陸軍飛行学校、明野陸軍飛行学校を創設して、そこに移して機関科が分離して陸軍航空技術学校となつた（昭和十年）。最後に陸軍航空整備学校を創り整備要員の教育をそこに移し（昭和十二年）、学校そのものはなくなつた。

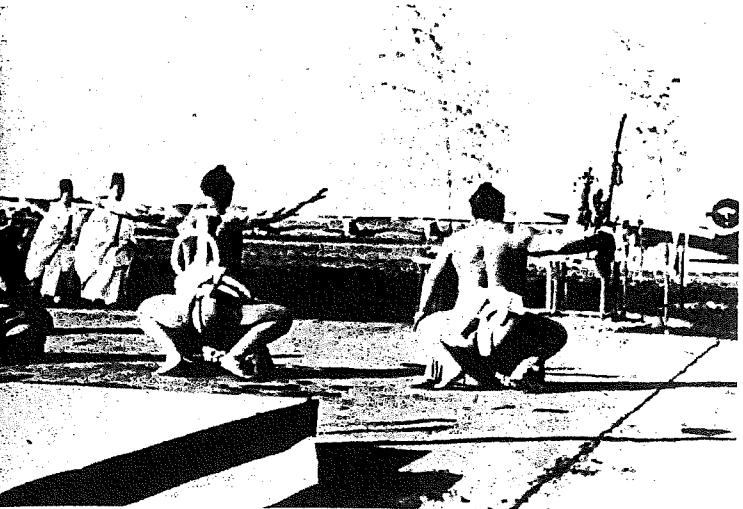
◎熊谷陸軍飛行学校は少年飛行兵のメッカ  
もともとは少年をパイロットに養成する目的で昭和十年に開設された。十二年からは気象航法の教育も取り入れた。

この学校から東京陸軍航空学校、宇都宮陸軍飛行学校、太刀洗陸軍飛行学校などが独立分離した。これが昭和十三年から十五年にかけてのことである。

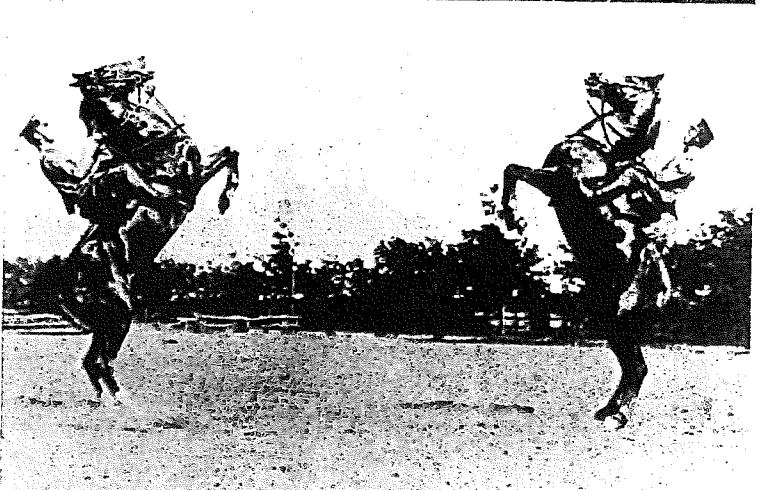
その後はさまざまのタイプの操縦関係の学生を受け入れた。



少年戦車兵学校。子供のときから慣れさせて優秀な下士官を育てようとした。



陸軍航空技術学校。篤志家から奉納された飛行機を土俵上で清めた。



騎兵学校では馬術の伝統が途絶えないように騎兵将校の技を磨きつづけた。

最後は陸軍経理学校、陸軍軍医学校、陸軍獸医学の三つである。これを各部の学校と称した。それぞ明治時代に創設された。経理学校を卒業した者が主計将校として各部隊に配属され、物資の調達補給と管理、將兵の給与・給養（食事）を担当し、必然的にそれに係わる会計を担当した。経理学校は裸眼で〇・七以上（海軍は〇・二）以上あれば受験してきたので、視力で陸士をあきらめた優秀な中学生が集まつた。長く主計官と呼称していたが、昭和十二年から主計少佐とか主計大尉などのように、普通の将校の階級に主計をかぶせて呼ぶようになった。

普通の将校ほど需要がなかつたのか、大正十一年から昭和十年までは一般からの募集ではなく、一般下士官を教育して充てた。普通の階級呼称はこれら新規応募者が卒業するのに合わせたものだ。折しも日中戦争が進行中で、戦意高揚の一面もあつたのだろう。

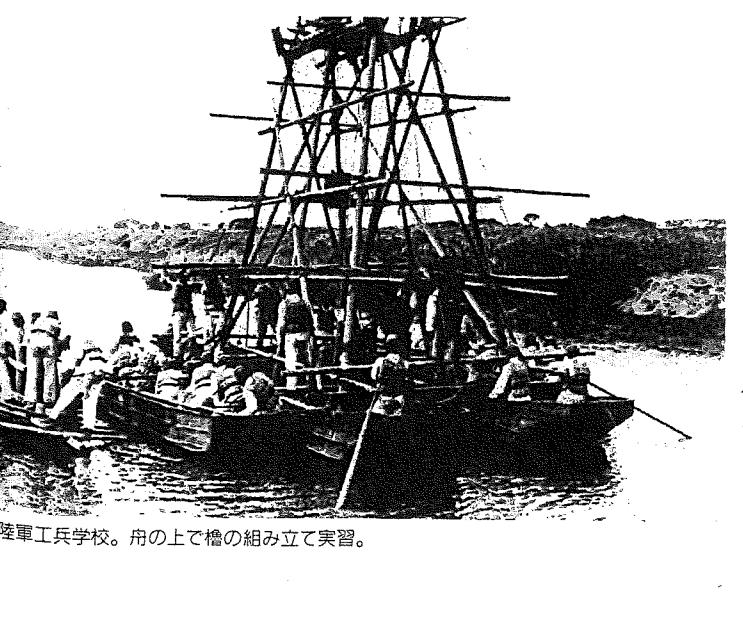
しかし、主計将校は指揮官でないことは明らかで、もともと非戦闘員であった。それは軍医も獸医も同じである。

戦争が始まると野戦貨物廠（兵器・弾薬以外の物資の補給を担当）は主計将校が主計部員を指揮して、前線に食糧を届けたが、太平洋戦争末期の激戦地では敗色が濃くなると、主計将校も武器を持って兵隊といつしょになつて戦い、大きな損害を出したところも少なくない。

## 各部の学校



陸軍自動車学校。演習出発に際して校内の神社に参拝。



陸軍工兵学校。舟の上で櫓の組み立て実習。

◎偵察、戦闘、爆撃の専門学校  
一口に飛行といつても専門分野があり、爆撃機と戦闘機では相当の違いがあつた。爆撃機・パイロットを戦闘機に乗せても使い物にならなかつた。すなわち、戦闘機の教育訓練は明野陸軍飛行学校で、爆撃機は浜松陸軍飛行学校、偵察機は下志津陸軍飛行学校でそれぞれ教育訓練した。それぞの教育期間は三ヶ月から八ヶ月である。

大きく分けると戦闘機、爆撃機、偵察機だが、それぞれに学校が分かれていた。

大きくなれば、戦闘機の教育訓練は明野陸軍飛行学校で、爆撃機は浜松陸軍飛行学校、偵察機は下志津陸軍飛行学校でそれぞれ教育訓練した。それぞの教育期間は三ヶ月から八ヶ月である。

# 中野学校とは？

中野学校といえばスパイ養成所ということになつてゐるが、事実としても、そこで繰り広げられた教育はまことに異質であつた。

## 本格的な情報参謀将校の養成所

昭和十二年に誕生、当初は後方勤務要員養成所と称した。翌年、東京・中野の憲兵学校隣に校舎を建てて引っ越ししてから、中野学校と呼ばれた。



マレー作戦では藤原機関が英印軍のインド兵を寝返らせ、組織した。機関員に中野出身者が多かった。

のはまつたくおらず、陸軍内部でもごく少数の者しか知らなかつた。部内では東部三十三部隊とも呼ばれていた。隣にあつた憲兵学校でも知らなかつた。

戦後、その憲兵学校を卒業した元憲兵が、中野学校という秘匿名を知り、自分たちのことをそう呼んでいたのかと「発見」し、中野学校出身者として、映画の制作などに協力していたという話もある。

後方勤務要員とは漠然としているが、じつは本格的な情報参謀将校要員だつた。いわばスパイであるが、スパイ活動が成功する最大の条件は、自分がスパイであるということを知られないことである。中野学校の生徒は、軍人であるということを隠すために背広で学校に通い、世間並みに長髪だった。平服だから、どこであれ上官に対しても敬礼することも禁じられた。

軍人臭さをなくすためにどこまで徹底させていたのか。生徒は予備士官学校を卒業して少尉に任命されたとき、第一期生は十八人。その一人が、次のように語っている。  
「たしか入所して一日目だつた。一、三人で立ち話をしているところへ、秋草俊中佐（中野学校の初代校長）が、入所式で述べた訓示は、一期生の記憶によればつぎのようない内容だつた。

「戦争の形態は、野戦から国の総力を結集して戦う、総力戦態勢に移行しつつある。したがつて軍情報も、従来の大公使館付武官からの軍事情報だけでは十分ではない。政治、経済、思想、宗教等、広範囲の情報が必要とするのだが、武官は二年なし五年で移動する。一か所に定住するといふことがないから、その国人の人情風俗にうとく、また軍人は、なんといつても社会常識にとぼしい。しかし、専門以外の情報は不得手なので、軍は社会常識も豊かな幹部候補生出身者を選んで、適切な教育を施すことになつた。そのテストケースとして選ばれたのが諸君である。

諸君は、この養成所で一年間の訓育をうけたのち、たぶん、ソ連、中国、あるいは英米と、世界各國へ派遣されるだろう。そして、その地に骨を埋める覚悟で定住し、武官にさぐりえない情報をさぐるのである。つまり、ユニホーム（軍服）を着ない武官となるわけだ。したがつて軍の諸君にかかる期待はきわめて重いのである。しかも、これは公的機關ではないから、絶対に秘密を要し、諸君の身分の秘匿も今日ただいまから始まる」

## 「居所の変わらざる武官」の養成

中野学校で教育しようとしていた情報将校は、軍事情報だけでなく、総合的な情報収集ができる将校を養成しようとしていた。

秋草俊初代校長（当時は所長）が、入所式で述べた訓示は、一期生の記憶によればつぎのようない内容だつた。

「戦争の形態は、野戦から国の総力を結集して戦う、総力戦態勢に移行しつつある。したがつて軍情報も、従来の大公使館付武官からの軍事情報だけでは十分ではない。政治、経済、思想、宗教等、広範囲の情報が必要とするのだが、武官は二年なし五年で移動する。一か所に定住するといふことがないから、その国人の人情風俗にうとく、また軍人は、なんといつても社会常識にとぼしい。しかし、専門以外の情報は不得手なので、軍は社会常識も豊かな幹部候補生出身者を選んで、適切な教育を施すことになつた。そのテストケースとして選ばれたのが諸君である。

諸君は、この養成所で一年間の訓育をうけたのち、たぶん、ソ連、中国、あるいは英米と、世界各國へ派遣されるだろう。そして、その地に骨を埋める覚悟で定住し、武官にさぐりえない情報をさぐるのである。つまり、ユニホーム（軍服）を着ない武官となるわけだ。したがつて軍の諸君にかかる期待はきわめて重いのである。しかも、これは公的機關ではないから、絶対に秘密を要し、

諸君の身分の秘匿も今日ただいまから始まる」

代校長）がきあわせて、話の仲間ににはいった。何かのひょうしに『天皇』の名が出たので、われわれが急いで『氣をつけ』の姿勢をとると、いきなり『バカ者ッ』とどなりつけられた。

「天皇の名をきいて直立不動の姿勢をとるのは軍人だけだ。仮におまえたちがセビロを着て地方人（軍人以外の者を指す慣用語）になりますいても、それでたちまち化けの皮がはがれてしまつ……。第一番に天皇もわれわれと同じ人間だといふことを知つておけ」と叱られた。當時としては、不敬きわまることばで、予備士官学校で徹底的に天皇の尊嚴や、規則正しい生活を叩きこまれた直後だから、われわれはかつて違いにござまし、しばらくはその生活になじめなかつた」（畠山清行著『陸軍中野学校』サンケイ新聞出版局 昭和四十一年。以後の引用も同書による）。

ここに出てくる秋草俊中佐こそ中野学校の必要を説きつづけて実現させた一人だが、彼自身もはとんどそれまで背広で過ごし、諜報活動に従事していた。ロシア語をはじめ数ヵ国後をあやつったというが、家庭では微塵もそういう気配をみせなかつた。

「結婚当时こんな逸話がある。夫人は見合いで嫁入つたものの、夫の秋草は師団から帰れば、飯を食うとき以外は軍歌を歌つてゐるか、ところがまわづ横になり、大いびきで寝てゐるだけ。夫人は（ひょつとしたら、この人はどうかしているのではないか）と心配して、当時新聞で盛んだった身上相談欄に、相談の手紙を出した」という。

「町を歩いてゐる美人に、きつかけをつくるにはどうしたらいいか。裏切つた女に復讐するもつともいい方法は、どうすればいいか」「共産党をどう思うか。日本とアメリカを比較して、違う点を五つあげよ。キリスト教と仏教の相違点も、五つ聞かせてほしい」「この場で腹が切れるか」

このほか、わざとグアム島を消した地図を見せて、グアム島はどこか、と訊ねるケースもあつたという。一回だけ試験に立ち会つたといふ人は、受験生の素質がいかに優れていたか、次のように回想している。

「試験官が机の上に、インキツボ、タバコ、本、灰皿、湯飲み茶碗など、十種類ほどのものを置いて、受験生を呼びこんだ。そして官姓名だけを名乗らせておいて、すぐ隣の部屋へ行くように命じたから、その部屋にいたのはほんの十数秒だつたろう。ところが、なんと、隣の部屋で、試験官の机の上に何があつたかをきくと、すらすらと十種類全部を答えた。もちろん、それをきかれることを予想していたわけでもなく、またインキツボ、灰皿、湯飲み茶碗、タバコ程度なら、あてずっぽうでも答えられる。ところが、おどろいたのは、一瞬のうちに、背文字まで読み取つてゐたとみえ、本書名から、試験官も気づかなかつた、灰皿の横にマッチの軸が一本ころがつていてことまで答え

「女は好きか？ 好きになつた女に、情死を迫られたらどうするか」

「女は好きか？ 好きになつた女に、接吻の場面をみて、なんとも感じないか」

「海南島はどこにあつて、どんな重要性があり、女と男と、どちらがどのぐらい多いか」

「野原に大小便がたれ流してある。それをみて、女のものが男のものか、判断するにはどんな注意

たことだ。その観察力、記憶力はまるで神業で、自分も士官学校ではけつして成績の悪いほうではなかつたが、とうてい及ばないと舌を巻いた記憶がある」

### 一年間でどんなことを学んだか。

講義は、諜報・謀略・防諜・宣伝を中心に行われた。講師となる軍人も背広姿でやつてきて、「連合艦隊が何を争論や占領地行政などさまざまな話をした。それは非常に具体性を帯びたもので、海峡を通過するにはどれくらい時間がかかるとか、潮流の関係で商船がどうなるとか」という事実に海峽を通過するにはどれくらい時間がかかるとか、



ビルマ義勇軍も光機関の中野出身者が中心になってつくりあけたものだった。

則した話が中心だった。

政治・経済・思想・宗教といった学科も、時事問題と関係づけた生きた講義が行われた。

忍者の達人もきてその極意を話し、スリの名人も実演で妙技を披露した。生徒たちは、その技術や欺騙術（変装術）から何かを吸収し、将来に役立てようとしたわけである。

当時、謀略機材の研究開発にあたつていたのが登戸研究所だったが、かれらからは特殊爆弾、偽造紙幣、盗聴用器材などのカラクリや作り方などを学んだ。牛込（現新宿区）にあつた秘密通信検閲機関であつた「兵務局分室」からは、その道の専門家がやつてきて、薄い刀物を当てた触感から、紙とノリの違いを見分ける方法などを伝授するなど、きわめて実戦的な授業が続いた。

武術は柔道より植芝流の合氣道が「一撃必殺の効果」が高いとして採用された。ある人はこう回想している。

「憲兵司令部の道場で、植芝盛平老先生の親指一本で平グモのように、三人力の天龍さんが押しつぶされ、苦しそうに充血した顔が、今も目に残っている」

とにかく諜報活動に必要な知識と技ができるか、ざり詰め込んだのが中野学校だった。

「前期の教育は、主として術課で、自動車学校、通信学校、工兵学校、飛行学校などへ九段（一期生のときの訓練所は東京・九段の愛国婦人会の建物の一部を借りていた）から通つては無線の操作を教わり、自動車や飛行機の操縦練習もした。もち

飛行機のどの部分に、どのぐらいの砂糖を投げこんだら、飛び立った飛行機が何時間後に墜落するとか、あるいは敵船に潜入り、どの部分に爆薬をしけたら効果があるとか、鉄道爆破、列車転覆、焼夷（放火）法……信書開封還元の初步から、毒物謀殺、砲臺爆破にいたるまであらゆる謀略資材操作の実際を学んでいた」のだが、本来の目的は遊撃ではなく、外国永住の「秘密戦士」の養成だったからである。

しかし、戦局の敗勢で新たに学校を創設する時間的余裕はなく、結局、南方戦線に派遣してゲリラ戦を指導する要員が大量に養成されはじめたのである。「遊撃戦教令」をつくり、遊撃要員の教育が実施された。三ヶ月ごとに二百四十人の大量要員を教育しては各地に派遣するというものである。二俣分教所はそのための根拠地となつた。昭和十九年になると戦争の帰趨はさらにはつきりしてきた。日本本土そのものが戦場になるという事態がはつきりしてきた。そこで、「軍は、本土でも米軍を迎え撃つ正規軍の翼側に、遊撃部隊（ゲリラ部隊）を配置して援護にあたらせる」べきである。敵の背後をつかせての戦線かく乱作戦実施の必要から、遊撃戦幹部要員として、青年士官の大量教育を中野学校に命じた。

またこのころから離島残置諜者の養成も実施された。南方の島、日米が交戦中の島に潜入して、命があるかぎり踏みとどまつて「敵の意図を無電通報する」というのがその任務である。

中野学校出身者と兵隊一人の一班四人の離島残

ろん、半年や一年の間に、飛行機が自由自在に操縦できるほど上達するはずはないから、飛行場から敵機を盗み出す。つまり、飛び上がるといど

各必修語をきめられたらしいが、われわれのときは、英、露、支、マレー語など少なくとも「カ国語をマスターすることを要求されたにすぎない」技術より習得できなかつた。

語学は、二期生からはそれぞれ、入学と同時に官学校からもさらには教導学校（下士官養成学校）からも採用した。昭和十六年になると陸軍大臣の管轄から、本来の姿である参謀総長直轄となり、秘密戦士、情報参謀将校の養成に拍車がかかつた。最終的には約二千三百人の卒業生を送りだして、それが次に述べる遊撃戦要員の養成にも手を広げたからである。それだけの要員を教育するには中野学校の敷地だけでは足りず、長野県二俣町に分教所を開設した。

太平洋戦争が日米攻守どころを変えて、しだいに押され気味に推移するようになると、中野学校の教育内容も変化していく。軍服を脱ぎ、外国人に永住覚悟で幅広い高度な情報を収集するという当初の目的ばかりを追求するといったのんびりした教育をしていくにいかなくなつた。中野学校側ではそういう遊撃戦士は別の学校をつけたままだ。中野学校ではそういふ遊撃戦士は別の学校をつくつて教育すべきだと、最初は受け入れに難色を示したといわれる。中野学校でも、「たとえば

置諜者は、十九年末から三十年にかけて硫黄島、沖縄本島、徳之島、西表島、石垣島、台湾などに派遣された。

昭和四十九年三月、小野田寛郎氏（少尉）がフィリピンのルバング島で救出されたが、中野学校や残置諜者という聞き慣れない言葉に、多くの国民が初めてふれたきつかけとなつた。小野田氏のケースは最初からの残置諜者要員ではなく、二俣分校でゲリラ戦を教育され、マニラに派遣され、さらにそこから軍司令部の命令でルバング島へ派遣されたものだという。島に米軍が上陸したのは昭和二十年三月二日だが、七十五人の守備隊は半減した。終戦とともに大半が投降したが、小野田氏はじめ四人の生死が不明だつた。結局、小野田氏は三十年後にただひとり生き残りとして救出されたが、小野田氏としては「残置諜者」任務遂行のため、命令を遵守していたに過ぎなかつた。

### 「謀略は誠なり」を教えた中野学校

中野学校では情報参謀将校としての精神教育に意を注いだといわれる。

「肩章のベタ金や星の数をひけらかし、勳章を胸にぶらさげて闊歩する児戯に類する行為は、立身出世にきゆうきゆうたる天保銭組（陸軍大学卒業生）にまかせておけばいい。諸君の勳章は、みずから手で、自らの心に飾るべきである。つまり『人類社会のためにつくし、國と人民のためにつくした』という誇り」それこそ、将官の位よりも、勳一等の勳章よりも眞実の、そして尊い勳章なの

### 拡大する中野学校教育

昭和十四年からは、予備士官学校だけでなく士官学校からもさらには教導学校（下士官養成学校）からも採用した。昭和十六年になると陸軍大臣の管轄から、本来の姿である参謀総長直轄となり、秘密戦士、情報参謀将校の養成に拍車がかかつた。最終的には約二千三百人の卒業生を送りだして、それが次に述べる遊撃戦要員の養成にも手を広げたからである。それだけの要員を教育するには中野学校の敷地だけでは足りず、長野県二俣町に分教所を開設した。

太平洋戦争が日米攻守どころを変えて、しだいに押され気味に推移するようになると、中野学校の教育内容も変化していく。軍服を脱ぎ、外国人に永住覚悟で幅広い高度な情報を収集するという当初の目的ばかりを追求するといったのんびりした教育をしていくにいかなくなつた。中野学校側ではそういう遊撃戦士は別の学校をつくるべきだと、最初は受け入れに難色を示したといわれる。中野学校でも、「たとえば

このような滅私奉公の極致が繰り返しきりかえし各教官から説き継かれた。感激した生徒たちのなかからは、栄進を望まないのだから、少尉とか中尉の階級はじやまである、軍籍を離れて思い切り奉公したいという申し出をした者も少なくなかつた。しかし、軍籍離脱だけは許されなかつた。せつかく送られた情報も、一民間人からの情報ということがわかれれば、軍はけつして取り上げないということが、教官たちにはわかっていたからである。当時は「軍人であらざれば人にあらず」という観念が軍には根強かつたのである。

中野学校は、國家の捨て石としての情報将校に大満足をもつて死ぬ根拠を、国家に対する誠と自身にたいする誠の精神を直結することによつて、納得させようとしたのだった。それは必ずしも中野学校だけの考え方でなく、軍人精神の理想ともされたものだつたが、中野学校ではいくら任務を果たしても、勳章と昇進という形で報いることはないだけに、いつそう徹底して教育する必要があつたのである。

第二十七師団の前身は北支那駐屯混成旅団で、この部隊は長らく天津方面の警備と治安維持に当たっていたが、十三年二月に支那駐屯兵團に改編され、さらに同年六月にふたたび改編されて第二十七師団となつた。

編成直後の十三年七月、師団は華中方面の戦線に投入され、第十一軍（岡村寧次中将）の指揮下に入つて武漢攻略作戦に参加し、作戦終了後は華北に戻つて天津周辺の警備や治安作戦などに従事した。昭和十四年九月に支那派遣軍が新設されると、師団はその直轄兵团となつたが、華北での警備・治安維持が主要な任務であった。

十八年六月、師団は関東軍の指揮下に入り満州に駐屯していたが、十九年二月になつて大陸打通作戦に参加するためふたたび華北に舞い戻つた。そして四月からの京漢作戦、五月からの第一次湘桂作戦に従軍し、さらに華南の飛行場破壊を行つた。二十年に入ると廣東に駐屯したが、連合軍の上陸に備えて南京方面を強化することになり、南京方面に後退中に終戦となつた。

## 復員の目処をつけ自決した納見師団長

第二十八師団は昭和十五年七月に満州の新京で新設され、編成完結後、関東軍直轄部隊に編入されてハルビン、チチハル方面に駐屯して北滿の防衛に当たつた。師団の所属歩兵連隊は歩兵第三（東京）、第三十（高田）、第三十六連隊（鶴江）の三個連隊で、いずれも明治期に創設された伝統ある連隊である。

太平洋戦争中も第二十八師団は満州に駐屯し続け、また対ソ戦に備えてトーチカに対する攻撃訓

練習も実施された。一方、二十一年九月に満州に上陸した連合軍の軍艦「アーヴィング」号は、八月三十日午前五時半に日本軍の雷撃艇によって沈没した。これは日本軍が自らの雷撃艇によって沈没させたものである。

## 第二十八師団

通称号：雷 編成時期：昭和十五年7月10日 編成地：満州 補充担任：名古屋 最終時の所在地：グアム島（全滅）

終戦時の上級部隊：第32軍 所属歩兵連隊（終戦時）：第3（東京）、第30（高田）、第36（鶴江） 歴代師団長：

1 石黒貢蔵（昭和15年8月1日～18年3月1日）  
2 柳瀬信一（18年3月1日～20年1月12日）  
3 納見敏郎（20年1月12日～終戦）

第一二十九師団

通称号：雷 編成時期：昭和16年2月25日 編成地：満州 補充担任：名古屋 最終時の所在地：グアム島（全滅）

最終時の上級部隊：第31軍隸下の南部マリアナ地区集団 所属歩兵連隊（最終時）：第10（豊橋）、第38（奈良）、第50（松本） 歴代師団長：

1 上村利道（昭和16年4月1日～18年10月29日）

2 高品彪（18年10月29日～19年7月28日・全滅）

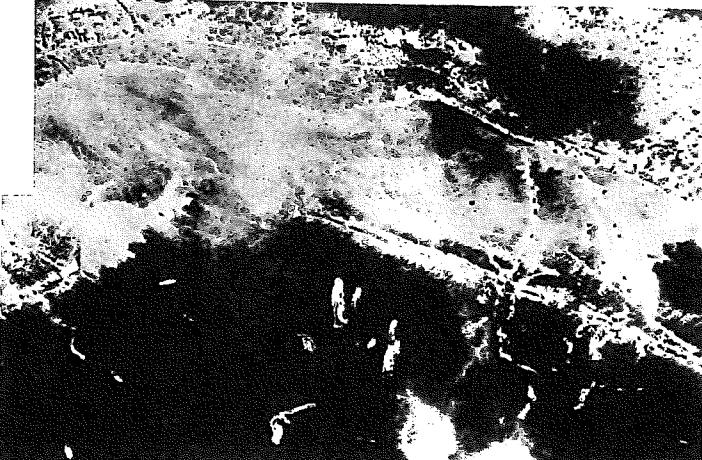
## 絶対国防圈の要グアム テニアンで全滅

第一二十九師団は歩兵第十八（第三十二師団）、第三十八（第十六師団）、第五十（第十四師団）の三個歩兵連隊を基幹に満州で編成された。しかし、第三師団が華中で作戦中、第十六師団は日本本土にあり、編成が発令された昭和十六年二月二十五日から、第二師団の歩兵団司令部と歩十八が編入されて完全に完結するまでおよそ一年の歳月を要している。

編成後、師団は関東軍の直轄部隊として満州の防衛と対ソ戦の訓練に従事していたが、十八年九月に千島列島からビルマにいたる広大な最終防衛

ライン、いわゆる絶対国防圏が策定されるところ。しかし、移動中に歩十八が米潜水艦の雷撃を受けた結果、連隊はサイパンで再建された後、グアム十一軍（小畠英良中将）の南部マリアナ地区集団に属し十九年三月に絶対国防圏の要ともいえるグアム島に進出した。

米軍は六月十五日にサイパン島に上陸し、サイパンの日本軍守備隊は七月七日に全滅する。二十二日になると米軍は矛先を日本軍に奪われた米国領であるグアム島に向けてきた。米軍が上陸したのは西海岸のアサンビーチとアガット湾（現在のニミツツビーチ）の二ヵ所で、アガット湾正面に布陣していた歩兵第三十八連隊は、米軍の上陸初日にはほとんど壊滅状態に陥つた。グアム島で戦闘指揮を執つていたのは高品彪第二十九師団長と、パラオに出張中に米軍がサイパンに上陸したため同島の司令部に戻れなくなつた小畠英良第三十一軍司令官であった。二人は米軍の圧倒的な兵力を前にグアム島の死守は不可能と判断し、七月二十五日に総攻撃を行うが失敗し、八月十一日、北部に追いつめられた小畠軍司令官と高品師団長がマタガスク山（又木山）で自決。日本軍の組織的な抵抗は終わつた。一方、米軍は七月二十四日にテニアン島にも上陸し、わずか九日間で全島を制圧、歩兵第五十連隊は同島で全滅した。



空爆と艦砲の支援を受けてグアム島のアガット湾に殺到する米軍。アガット湾正面に配置されていた歩38は米軍上陸初日に壊滅した



テニアン島で米軍に投降する邦人たち。テニアン島には軍人のほか約13000名の邦人があり、彼らも戦闘に巻き込まれ死んでいった



終戦直後の20年9月7日、沖縄で降伏調印式に臨む日本軍の代表（左側の3名）と、米軍を代表して署名するスタイルウェル大将

練などに従事していた。しかし、太平洋の戦局が日本にとって不利となり、最終的な防衛ラインとして絶対国防圏が定められると満州から兵力の抽出が相次ぎ、十九年二月に第十四、第二十九師団が関東軍からの南方抽出第一陣として転出した。

六月十五日に米軍がサイパンに上陸すると、歩三十六がサイパン奪還のために派遣されたが、途中でサイパン奪還作戦は中止され、歩三十六はその後師団に復帰するが、まもなく南および北大東島、一部は沖縄に派遣された。

六月二十六日になると第二十八師団主力にも南西諸島への転出が命じられる。師団は南西諸島の宮古島、石垣島方面の防衛を担当する先島集団の中核部隊となり宮古島に移駐した。日本軍は米軍が沖縄本島に上陸する前に、まず台湾、さらに宮古島や石垣島などに侵攻してくるだろうと予想しており、精銳の第九師団を沖縄本島から引き抜いたのもそうした予測の上で決定された。宮古島に駐屯する第二十八師団でもできる限り早く防衛態勢を確立するよう求められた。ところが、二十二年四月一日、米軍は日本軍の予測の裏をかくように行方不明となってしまった。宮古島の師団は孤立し、そのまま終戦を迎えた。

沖縄本島の第三十二軍首脳が六月二十三日にことごとく自決したため、先島集団司令官の納見敏郎第二十八師団長が、奄美群島陸海軍司令官とともに現地日本軍を代表して九月七日に降伏文書にサインした。納見中将は「古き時代の軍隊の勇姿」として記念撮影が行われた。

ライジング、いわゆる絶対国防圏が策定されるところ。しかし、移動中に歩十八が米潜水艦の雷撃を受けた結果、連隊はサイパンで再建された後、グアム十一軍（小畠英良中将）の南部マリアナ地区集団に属し十九年三月に絶対国防圏の要ともいえるグアム島に進出した。

米軍は六月十五日にサイパン島に上陸し、サイパンの日本軍守備隊は七月七日に全滅する。二十二日になると米軍は矛先を日本軍に奪われた米国領であるグアム島に向けてきた。米軍が上陸したのは西海岸のアサンビーチとアガット湾（現在のニミツツビーチ）の二ヵ所で、アガット湾正面に布陣していた歩兵第三十八連隊は、米軍の上陸初日にはほとんど壊滅状態に陥つた。グアム島で戦闘指揮を執つていたのは高品彪第二十九師団長と、パラオに出張中に米軍がサイパンに上陸したため同島の司令部に戻れなくなつた小畠英良第三十一軍司令官であった。二人は米軍の圧倒的な兵力を前にグアム島の死守は不可能と判断し、七月二十五日に総攻撃を行うが失敗し、八月十一日、北部に追いつめられた小畠軍司令官と高品師団長がマタガスク山（又木山）で自決。日本軍の組織的な抵抗は終わつた。一方、米軍は七月二十四日にテニアン島にも上陸し、わずか九日間で全島を制圧、歩兵第五十連隊は同島で全滅した。